270
489

始

特100-82

底抜け倶樂部

叉狂著

大正
1.11.22.
内交

斯書を知己
友人に贈る

本書を讀む者、或は哄笑するあらん、或は噴飯するあらん、或は腹の皮を撚るあらん、或は慨歎するあらん、或は首肯するあらん、そは讀む人の勝手のみ、著者は是でも大眞面目に候。

記する所、悉く著者の見聞したる事實談にて、片言隻語、戰々競々として、敢て虛僞に陷る無からんことを努めたれども、中には少々誇張誇縮したる點あるやも計り難し、其の邊は御含みの上、御覽下されたく候。敬具

大正元年拾一月三日

鐵州詞兄

又狂

底拔け倶樂部目次

便所時間の割當……一
狸の毛……二四
催眠術は不眠術……四六
フロック新調……七一
小石で人殺し……九八
自然主義教育論……一一九
貳圓五拾錢が本當……一三七
兎耳坊の惡戯……一六六

目次

牛肉一斤は幾キレか……一八八
パン屋征伐……二一〇
五錢玉の一件……二三〇
便所でお化粧……二五六

終

底拔け倶樂部

又狂著

一　便所時間の割當

底拔け倶樂部と云つても、それは一般に通つて居る名ではない、實際は僕の家なんだ。僕の御父樣は碁が好きで、談話が好きで、酒が好きで、莨が好きで、加之氣が長いと來て居るから、自然遊びに集る人が多い、土曜日の午後から日曜日の夜にかけては、二三人の顔が揃つ

て居ない時はない位だ、而もそれが總て底拔けの悧巧者許りなさうで何時誰が言ひ出したのか、吾家に底拔け倶樂部といふ名を附けた。

御父樣は小學校の校長だが、月給は幾ら取つて居るか僕は知らないけれども、家賃は拾貳圓拂つて居る。玄關の貳疊を這入ると、突當りが八疊の客間兼御父樣の書齋、右が六疊の茶の間、左が四疊半で、僕と姉さんの居間に定まつて居る、倶樂部に充てゝあるのは茶の間と客間だ。

倶樂部員と云つて、別に六ケ敷い資格が要る譯では

ない、御母樣からお客としての禮遇を停止された連中が、即ち倶樂部員なんだ。それで二度遊びに來ると、直ぐ倶樂部員になることが出來る、イヤ御母樣が倶樂部員にして了ふのだ。

土曜日の午後一時、もう根古先生が見える時刻だと思つて居ると、果たして來たね、スーッと風のやうに這入つて、例の如く眞黑な膝小僧を二つ押並べるが早いか、

『校長一石願ひませうかなア』と言つて、袂から淺草紙の厚いやつを取出し、不景氣に鼻汁をかんで、又それを

袂に納めたもんだ。先生腦が惡いと言つて、始終鼻汁を出して居る。下手の横好きと來て、圍碁と言へば三度の食事以上だ。

『やあ、相變らず時間が正確ですね』と御父樣が言ふ。

『時間を正確に守りませんちうと、勉强が出來ないです』と根古先生は自慢らしく言つて、袂から大和を一本摘み出して火を點ける。

『時に試驗の方は何うです、準備は捗取りますかね』

根古先生は御父樣の學校に勤めて居る正敎員だが、文部省の數學敎員檢定試驗に應ずる準備中ださうだ。

『參考書が中々多いですからなア、何から手を着けて可いか、實に困難ですよ、そいで今年は一月一日から、整然時間割を作つて、秩序的に勉強することにしたです、參考書の數が參十冊で、此紙數が合計一萬八千六百七十三頁あるですが、之を八月迄に讀み了る豫定で、一日に幾頁づゝになるか、計算して見ますちうと、恰度七十六頁二百四十三分の百十九に當りますなア、之を更に時間に配當したですが、一日の勉強時間を午前五時から午後十二時迄としまして、これから洗面の時間、學校勤務の時間、食事の時間、運動の

時間、喫煙の時間、用便の時間、其他雜用時間を差引ますちうと、僅かに十時間と二十五分ほか殘りません、然うしますちうと、一時間に四頁と一萬五千九百六十三分の一萬八百四十頁だけ讀まんければならんですなア』袂から濕れた淺草紙を出して鼻汁をかんだ。

『能く計算したものですね』と御父樣は感心して居る、何事でも直ぐに感心するのが御父樣の癖だ。

『そこはあなた、何と言うても專門ですからなア、併し一日間の勉強時間の統計を取るには隨分骨が折れ

たです、何しろ去年の十月からの統計を取つたですからなア、最も面倒ぢやつたのは用便の時間でした、これは飲食物の材料と分量とに依て、大に變動を生じますからなア、そいで先づ飲食物を一定して然る後統計を取つたです、又喫煙時間でも然うです、朝日、大和、敷島、富士、一々喫了時間に等差がありますから、これも大和一本と定めたです、食事時事なども頗る面倒でした、先づ一回咀嚼するには何秒を費やすかちう統計を取りまして、そいから例へば米なら米は幾回咀嚼すれば消化と賞味に適當であるかちうこ

とを品質に從つて一々統計を取つたです』

『それは大變でしたね、所で豫定通り行きますか』

『無論大體に於て行くことは行くですが、時々は苦しい事があるですなア、時間が切れるので用便をやりかけて出るとか、咀嚼の速度を早めて腮の關節を傷めるとか、尚一二分も殘つとる大和を喫ひかけて捨てるとか、其樣不都合がありますなア、朝寢をした時などは、洗面時間で融通するものですから、齒を磨かんことが度々です、殊に困るのは圍碁ですなア、こればかりは中途で止めては何の妙もないですし、第一

相手が承知しませんから、止を得ず臨時々間として消費するですが、その遣繰が實に面倒です、最初の間は午後十二時後に一時間づゝ、睡眠時間から融通したですけれども、睡眠不足が一番腦に惡いちうことですから、近來は讀書の速力を早めることにしました、昨日の計算に依ると、今では一時間に十二頁十五分の七の速力を以て讀まんければならん事になつて居るです』

『それは大變ですね、それでも記憶に殘りますかなア』

『なに、今度は六回目ぢやから譯はありません』先生得意然と又鼻汁をかむ。先程から四五回も引込んでは出、引込んでは出て居た膝小僧が、憚りもなく又眞黑な顔を押並べて居る。

『成程然うでしたね、今度は大丈夫ですよ、屹度受合です』と御父樣は自分の事かのやうに言ふ。

『ナニ、毎度知つとる問題ばかりですけれども、ツイ落第するですなア』

僕は六回も繰返して讀んだのかと、其の根氣に感服して居ると、なアんだ、繰返したは繰返したに相違ないが、落第を繰返したのだ。何樣知つてる問題だつて、ツ

イ落第しちや仕様がない、用便の時間まで計算して何をしてるんだ、僕なんかを鞭でコツン〳〵とやる癖に、御自分はこれだ、世界廣しと雖、學校の先生位弱い者いぢめをするものは居まいと思ふね。

根古先生も落第の話では、自慢も出來ないと氣が付いたのだらう、急に御父樣を促がして圍碁に取りかゝる、其處に伊奴先生が來た。此先生は僕の組の先生だから、僕も及ぶ限りの尊敬を拂つて居るんだ、成績の點を下げられたり、何でもない事で頭をコツンとやられては損だからね。此倶樂部では先生に對して名を呼ぶものはない、いつも代議士で通つて居る。夜學の法律學校に通つて、將來代議士に打つて出るんだと威張つてるからなんだ。併し孰らかといへば、先生餘り受の可い倶樂部員ではないね、何かといつては小理窟ばかり撚繰りたがつて、自分でも教員の癖に、他人事かの如く教員の惡口を言ふ、でも此倶樂部員中で、社會の事情に詳はしくつて、演說や修身講話などの上手と來ては、先づ此先生の上を越すものはあるまいといふ話、殊に政治上、經濟上、法律上の話と來ては、一同はカラ意氣地がないからね、流石に總理大臣と文部大臣の名前

は知つて居るが、農商務大臣は誰かと訊くと、もう早や返答に窮する、内大臣といふ大臣が今でも居るのかと言つて、伊奴先生に笑はれたものもある、地方裁判所が東京にある筈はないと言張つて、遣込められたものもある、會社は株式が多いやうだが、あれも矢張專賣特許かと振つた奇問を發して、大笑ひをさせたものもある。此樣だらしのない連中だからね、蔭では伊奴先生を惡く言つて居た所で、向つて議論の一つもやらうといふものは居ないんだ。それだから先生大威張で、平常は倶樂部員を這ふ蟲とも思つて居ない權幕だが、今日はめつきり萎れて居る、これには譯があるんだ、僕はちやんと其れを知つて居る。此うなんだ。

今日は學校で一番目の時間でも修身講話があつたが、それから一時間置いて三番目の時間で、例の如く習字をやつて居ると先生何と考へたものか、突然習字道具を納へと命ずる、何しろ餘り急なので、一同呆氣に取られてまゞ〳〵して居ると、先生非常にせきこんだもので、早く〳〵と叱る權幕といつたら、丸で狂氣のやうだ、ぐづ〳〵してる奴は無闇矢鱈にコツン〳〵とやられる、僕は近所に火事でも起つたのではないかと思つ

たね、墨汁を滾すやら、水入をひつくり返すやら、大騒をやつて、漸と道具を片付けると、先生又々修身講話を始めたもんだ、何程修身講話が上手だつて、此う打つ續けて聞かせられちや堪らんからね、僕は鼻糞萬金丹を慥へては机の上に五個まで並べて居ると、突然視學さんが傍聽に來た、僕はギョッとして敏やく手を膝に置きながら、反身になつて知らん顔をして居ると、先生は大得意で、時々視學さんの方を見ては、俺の手腕を見て呉れと言つた風。暫くすると視學さんは教室の入口に掲けてある時間割表を見に行つたが、少し氣色を變へ

て先生の傍に寄つた、何事かと思つて見て居ると、

『時間割には此時間は習字になつて居るが、何うしたんです』と來たもんだ。

先生は一寸顏色を變へたが、

『時間割を改正したんです』と平氣な風をする。

『それは何日からですか』と視學さんは先生を見詰めて其の顏色を讀まうとして居る。先生は暫く口をもぐ〳〵さして居たが、

「今日からです」と答へた。

すると視學さんが、

『校長の檢閲は濟んで居ますか』と來たね。

先生は唇を震はせながら

『ハイ、否え、一寸……』と遣つたもんだ、少しも要領を得ない。僕は机の上の鼻糞萬金丹をフッと吹いたら、三つは向側に落ちたが、二つは隣席の守田の前にゴロ〳〵と轉んで行つた。野郎何うするかと横目で見て居るとソッと摘んで嗅いで見たが、香ばしくもなかつたと見えて、指先で撚りつぶしながら、ピンと彈き捨てたら、前に居る津村の髪の毛にヒッかゝつた。

『濟んで居ないですな』と視學さんは怪しからんといふ風で言つて居る』

『それで第一校時には何をやつたんです、時間割を見ると修身になつて居るが』

先生は火のやうに赤くなつたね、額から汗をポト〳〵落して居るばかりで、何とも返事をすることが出來ないのだ。すると視學さんは生徒の方に向つて、

『皆さん一番目の時間に教はつたことを覺えて居ますか』と訊いた。

僕等は二時間前に教はつた事を忘れて堪るものかといふ勢で、一齊に手を擧げたね。視學さんは、

『あなた言つて御覽』と出口といふ生徒を指す。出口は直立不動の姿勢を取つて、

『修身講話で二宮尊德の話を敎はりました』とやつて嚴格に席に着いたもんだ。御褒美でも呉れるのかと思つて居ると、視學さんは宜しいと言つたまゝ出て了つたね。後で先生は修身講話の復習をやるんだと言つて、出口に二宮尊德の講話をやらせたが、間違つて居ると言ふので、散々叱り飛ばした上、頭を五つ程コツンコツンとやたもんだ。

此樣事があつたものだから、先生今日は少しも興まないで、平常は五月蠅く助言をする癖に、神妙に圍碁を見て居る。其處に佐留先生がやつて來た、大分威勢の好い先生だ。

『やあ代議士、今日は何うしたんだ』佐留先生はいきなり此う言つた。

『何うもしない』と伊奴先生はツンとして居る。

『何うもしないなら可いけれども、時間割の緊急改正なんかやつて、視學に油を取られたといふぢやないか』と佐留先生大笑ひに笑つて、日頃の鬱憤を霽すは此時だと言つた風、伊奴先生は『あの視學の野郎食へ

ない奴だ』と言つて、それでも仕方なく笑つて居たね、但し苦笑といふやつさ。此時圍碁が終つて、御父様も根古先生も談話に加はつた。

『君から食はれちや視學もやりきれまい』と御父様が笑ふ。

『そいでも食ふ積りでかゝつたですからなア、怖ろしい先生です』と根古先生までが評冷す。

『少しは食べかけて見たんだらうが、何様味がしたんだい』と佐留先生が言ふ。

『視學は刺身のつまのやうなものさ、體裁ばかりで何の役にも立ちやしない』

『そりやあ食はず嫌さ、食つて見たまい、月給の壹圓位は直ぐにあがるから』と佐留先生が笑ふ。

『全體何の爲めに時間割の緊急改正などをやつたのぢや』と根古先生が眞面目らしく訊く。伊奴先生は、

「ナニ、一寸……」と言つて、冷たいお茶を一杯グッと飲んだが、急に忘れて居た用があると言つて歸つて了つた。後で佐留先生は、

『先生御自慢の修身講話を視學閣下の上覽に供するために、態々時間割の緊急改正までやつて、月給の壹

圓も上げて貰はうと思つたんだらうが、御目玉を貰つちや置場もあるまい」と笑つて居た、一同大笑ひさ。

二　狸の毛

一寸僕のきやうだいを紹介して置くとにしやう、僕には一人の姉さんと一人の妹と一人の弟がある。姉さんの名は鹿子といつて今年十七になる、言ふ必要もないが、面相は一寸問題になるといふ話、病氣で一年休んだので、今は女學校の三年生だ、廂髪に大きなリボンをクッ着けて、赤い袴を穿いて、學校に通うのが何より嬉しいと言つて居る、學問などは憶えても憶えなくつても構はぬらしい。妹は虎ちやんといつて六つになる、食べることゝ言つたら命がけで騒ぐが、お化と聞くとそれさへ捨てゝ逃げる、八人藝が怖ろしく上手で、玩具をいぢくつては、一人で友人になつたり自分になつたり、大勢で遊んで居るやうなことを言つて居る。弟は兎耳坊といつて三つ、暗い所と鼠が大嫌い、多くの惡戯の内でも水いぢりと火いぢりが大好き。

僕か、僕は十三で小學の五年生、名は幾つもあるんだ、學校では小山さん、家庭では猪尾さん、猪尾太郎、馬鹿野

郎、先づ此様ものだ。所が不思義だね、名前が異ふと、自分ながら一々異つた人間のやうな心持がするね、小山さんと言はれると、大變に此う大人に成つた心持がして、忠君愛國、孝悌信義などゝ、漢語なんか交て、鹿爪らしい事を喋りたくなる、それで居て、其實僕は何にも解つちや居ないんだ。でも此様な事を喋ると、先生が大變に賞めるね、僕だつて賞められりや嬉しいからなア、一生懸命に此様事ばかり喋るのさ。猪尾さんと言はれると何だか我儘が言ひたくなるね、僕は始終猪尾さんで居れば可いと思つてる、猪尾さんの時だと、お錢を頂

戴と言へばアイヨだ、繪草紙を買つて頂戴と言へばアイヨだ、活動寫眞アイヨだ、花屋敷アイヨだ、左を右と言つてもソーヨだ、尤も一度位は不可ませんと來るけれども、其時は譯はないや、三十五度位の角度に首を曲げて、三分の一許り鼻を鳴すと『仕方がないねえ』が最後で、何でも彼でも言ふ事が通る、お母さんの頭の一つ位打ん毆つたつて平氣なもんだ。それが猪尾太郎の時と來ると大變よ、何だか此う重い布團で、ぴつくるめて壓付けられたやうな心持だね、殊に猪尾太郎ッと早く鋭く怒鳴られた時や、猪尾タローオッと郎の所を、いやに

強く引張つて、尻上りにやられる時なんぞと來ては、全く冷つとするね、頭から氷水を打つかけられたやうな心持さ。馬鹿野郎と來ては一層甚い、覺えはないけれども、鐵砲で一發打ち拔かれた時の心持だらうと思ふ、頭の髪が一本々々に直立するからね、所が天道人を殺さずで、其時は其時のやうに、又遣り方があるんだ。何日か知らん、甚くお母さんに猪尾太郎、馬鹿野郎を連發された事があつたんだ、其時は未だ智惠が足りないもんだから、殊勝にさへすれば猪尾さんに復舊すると思つて、室に引込んで、御母様に聞えるやう、ウンと聲を張上げて、讀本のお復習をしてゐたもんだ、所が大失敗だつたね『猪尾太郎ッ、八ケ間敷ねえ』とやられた。これは失敗つたと思つて、室の隅つこに小さくなつて、息を殺して居ると、手の先がもづ〳〵して來たから、爪先を利用して、傍の壁に色々の線を引張つて見ると、不思議だね、何時の間にか其れが猫の形になつた、こりや面白いと思つて、今度は鉛筆で仕上げをして居ると『馬鹿野郎ッ』と耳を破るやうな聲だ、見ると御母様が目を光らして立つて居る。

『何をしてるんだ、何故お復習をしないんです』

僕がお復習をしてると御母様が叱るぢやないかと閉戸しましてやる積りで『だつて……』と言ひかけると、

『だつてぢやありませんお復習もしないで、壁なんかに悪戯する位なら、さつさと戸外に出なさい』と怒鳴られた。僕は好い機會だと思つて、一目散に飛び出しお隣の金ちやんと一時間ばかり遊んで家に入つたら御父様が歸つて居て、嬉しさうに御母様と話して居たが、御母様は僕の顔を見ると『猪尾さん』と言つて、餅菓子の大きやつを二つ呉れた、譯はない、以來猪尾太郎や馬鹿野郎の時は、戸外に飛び出すに限ると悟つたね。所が爰に一つ困る事があるんだ、それは夜半にやられた時だ、戸外に飛出す譯には行かんし、これには一寸閉口だね、でも尚且天道人を殺さずさ、これに亦良い法があるから有難いぢやないか。イヤ夜半にまで猪尾太郎馬鹿野郎になるなんて、隨分間脫た話だが、耻を言はねば理が解えずさ、白狀すれば、實ア僕は寢相が惡いさうでね、御苦勞にも御母様の枕元まで轉んで行つて、ウンと御母様の鼻頭を蹴つたもんだ。御母様はアッと大聲を揚げて起上る、御父様も驚いて目を覺ます、兎耳坊は泣き出すといふ騒ぎよ、電光石火の如く『猪尾太郎ッ、

と來たね『幾ら叱つても〳〵お前は何故此樣なんだ、氣をお注け、御母樣の鼻頭を蹴つたりなんだり』何故だといつて、僕には一寸思ひ付がない、氣を注けつても、眠るとツイ覺えなくなるんだもの、此樣な時には返事の語に困るね、先づ『だつても』位で御免蒙むらうと思つて、小さい聲で言つて、早々に脫殼の夜具に這ひ込むと、御母樣は尙何とか叱る積りで、「猪尾太ローオッ」と來る。僕は全然狸をきめてやつた。『猪尾太ローオッ……小供といふものは罪のないもんだね、猪尾太郎、最う眠つたのか』僕は思はず眠つたよと言はうとしたが、アッと思

つて齒ぎりしに紛らしながら、聲を嚙殺して了つた。

『驚いたね、もう齒ぎしりなんかしてる』と御母樣は呆れた體、御父樣も吹出した。それから默つて聞いて居ると此樣事を話して居る。

『ねえ良人、猪尾太郎は餘り運動が過ぎるものですから、足がやめて轉ぶんですよ、全體學校では何樣運動をやらせるんです』

「なに、定まつた運動といつては體操位さ、」

『體操なんて餘計ですよ、それでなくつてさへ運動が過ぎるんですもの、其間に手習でもさしたら、何樣に

利益になるでせうに』僕だつて體操を廢すことには大贊成だけれども、其間に手習とは甚いね、それでなくつてさへ、勉强が過ぎるんだ、御父樣は何樣返事をするかと聞いて居ると、

『馬鹿なことばかり言つてる、學校の課程は確然小學校令で定めてあるんだ、其樣可い加減なことが出來るものか、運動が過ぎると思ふなら、家に歸つてから跳ね廻はらぬやうに、お前が何故叱らんのだ』

『何うして、叱つた位で靜つとして居るものですか、體操なら爲らせるものがなければ誰も好んでやるも

のはありませんよ』

「そこが教育ぢやないか、小供が好きなことを禁じて嫌いなことを爲らせるのが教育だぜ、それだから教育者は骨が折れるんだ、流河を押上げるやうなものだからね」

何うも驚いたね、それでは教育者といふものは、小供をいぢめるのが役目だ、聞いて見れば全く然うだ、過日なんかも先生が筆を一本持て來て、教壇でしきりに振廻はして居たから、何んな藝當をやるのかと思つて居ると『皆さんは之を知つて居ますか』と言ふ、眞逆筆を知つてるか何うかと尋ねるのではあるまいし、何と答へたものかと考へて居ると、誰かゝ『竹です』と答へたね、すると先生は『此處の所は竹だけれども、此處に此樣ものが附て居ます』と穗先を指したら、今度は又誰かゝ『毛です』と答へた、先生は苦笑をして居る『先生』と手を擧げたものがある、誰れかと思へば教壇の直ぐ下に居る出口といふ生徒だ『出口さん』と先生が言ふと『狸の毛です』とやつたもんだ、一同が笑出して了つたね、後で考へて見れば其の筆に『狸毛眞筆』とか何とか書いてあつたらしい、僕は四苦八苦の末、當るも八卦當らぬも八卦と思つて、

『眞筆です』と言つたら、眞筆は眞筆だが、尙外に名はないかと先生が言ふ、すると又出口が『狸毛眞筆です』とやつた、先生は苦りきつて『馬鹿ッ、此れが解らんか此れが、お前方が毎日使つて居るものを知んか』と筆を振廻はす、僕等は全く困つて了つたね、一同答へるものがない、すると先生は『此れは何をする道具』かと訊く『字を書くものです』と出口が答へた。『それでは字を書くものは何か』と先生が怒鳴る『鉛筆、ペン、筆』と僕が答へた『宜しい、それでは此れは鉛筆か』『否え』ペンか『否え』それでは何か『筆です』先生は大きに一つ點頭いて『然うです、此れは筆で

す、皆さん解りましたか、解つたなら手を擧げなさい』其樣ことなら七八年前からちやんと知つてるんだといふ勢で、一同が高く差し擧げた。すると今度は筆の發音を敎えるといふので『唇を僅かに離して、息を强く出すと、息が唇に摩擦して一種の子音が出ますから、其の子音に續けてウといふ母音を發するとフになります、さア皆さん言つて御覽なさい』『フウフウ、フウ、フウ』『フウぢやない、筆のことをフウデと言ふ馬鹿があるか、フだ』フならフと初めから然う敎えると譯はないんだ、僕は從來フウデと言つて居たのは間違ひで、フウデが眞實かと思

つたら、何だ少しも違つちや居ないんだ、そこで一同がフと叫ぶ。『今度は舌先を上歯の根元から硬口蓋の前部にかけて押當て、強く聲を出すと同時に急に之を彈くやうにして開けば、一種の子音が出ます、其子音にエといふ母音を連續して發すればデになります、さア皆さん言つて御覽』『ドエ、ドエ、ドエ』『馬鹿ッドエぢやないデだ』『矢張り又從來の通りだ、そこで一同がデと叫ぶ。『デと續けて』一同がハデと叫ぶ。『それでは筆といふ字を教えます』と言つて黒板に書いて見せる。人を馬鹿にしてらア、筆といふ字位、毎日使つて居る筆に明白と

書いてあるんだ、出口だつて狸毛眞筆を讀めるぢやないか、學校といふものは毎日此調子だからね、謎々見たやうなことを言つて僕等を困らせたり、無益らぬことを面倒くさく教えていぢめたり、實に嫌になつて了ふのだ、それでも嫌なことをやらせるのが教育だといふから、それも仕方がないとして、身體だけは自分〳〵の物だから、自由にさして呉れゝば可いけれども、手を膝に置け、足を動かすな、身體を眞直にしろ、他方見をするな、口を曲げるなと、間斷なく叱られるものだから、落付いちや勉強も出來ないんだ、せめて家に歸つてからな

りとも、自由自在に跳ね廻はつてやらうと思へば、寢相が惡くなるといふので、何だかそれも禁められさうになつた、こりや大變だと心配して居ると、

『だつても困るぢやありませんか』と御母樣は尙降參しないで居る。

『何がよ』體操をやらせるのが困るのか、僕の寢相の惡いのが困るのか、御父樣も要領を得ないらしい。

『猪尾太郎の寢相ですよオ』御母樣は聲が高くなつた。

『それは何とも仕樣がないね』

『仕樣がないでは困りますよ、何とか躾の法を考へて下さらんでは』

『寢相なんか何樣でも可いぢやないか』

『何樣でも可かありません、若しか妾の鼻柱でも蹴折つて御覽なさい、それこそ大變ですよ、敎育家とも言はれるものが、自分の子供の寢相一つ直すことが出來ないで何うしませうさ』

此事にやア御父樣も閉口したと見えて、寢返り一つして押默つて了つたね、それなりけりで僕は助かりさ、此樣時は何でも狸に限るね、兎耳坊なんども能く泣寢入といふことをやるが、矢張此の傳を知つてると見える。

僕の大好き？　然うさね、先づ菓子だね、それから公園に活動寫眞、然うだ活動寫眞は實に面白いね、戰爭、火事、地震、丸で實地を見るやうだ、學校でも先生が日露戰爭の話なんかするけれども、學校では耳に聽くだけだからね、眼なんか直ぐに體屈して了つて、居眠を初めるもんだから、頭がコツンとやられる、何も頭が眠つた譯ぢやないけれども、コクリと頭が下がるものだから、連帶責任でやられるんだ。　僕が嫌といつては、靜つとして居ること、先生に頭をコツンとやられたり、御父樣御母樣に臀をピシヤツとやられたりすること位なものだ、別に大嫌といふ程のものはないね、頭や臀を打たれるのだつて、恰度痒い所でいもあれば、却て仕合せだからね、それに打たれるのゝ艱いのは棒や手が落ちかゝつて來るのを待つてる間だ、其間の艱いことゝ云つては、到底ぢつとしちや居られない、其時は毎も兩手で頭を押へるのが僕の癖だ、臀を打たれるのに頭を押へるのも可笑いが、何うも癖だから仕樣がない、所が打たれて了へば樂なものだ、小言も糸爪もそれなりけりで落着だからね、それが幸に痒い所でいもあつたら、結句打たれ儲といふものだ、吾輩子供は打たれることを恐る

る必要はないが、靜かにしろと言はれるのが何より苦しいさ。

三　催眠術は不眠術

陽氣が段々暑くなるにつれて、僕の寢相が益々亂暴になるさうだ、『何遍叱られても解らない子だね、もつと氣を注けなさい』と毎朝御母樣に小言を言はれるけれども、床に這入る時は今夜こそと氣を注けて居ながら、眠るとツイ忘れて了ふから仕樣がない。

或土曜日の午後、今日は木津先生一人で御母樣と話して居る。

『木津さんは心理學にお詳しいさうですが、寢相を直す法はないものでせうかね、吾家の猪尾太郎は寢相が惡くつて仕樣がないんですよ』

『寢相が惡いといつて、何樣事をなさるんです』

『室中轉び廻はつて、妾の鼻頭を加減なしに蹴るんですもの、鼻柱が折れはしないかと思つて心配ですよ』

『そりや何うも亂暴ですね』と木津先生は眞面目らしく眉を寄せたが、口では笑を嚙殺して居る。

『餘り運動が過ぎるんですから、足がやめて轉び廻る

のですよ、學校でも體操なんか止してもらう方が可いと思ひます、何程規則だと言つても、此樣惡戯つ子に體操までやらせられて堪るものですか』

『そりや奥さん少し無理ですよ、子供が自分勝手に跳ね廻るのと、體操とは大に性質を異にして居るんです、即ち一は惡戯ですけれども、一は體育ですからね』

『だつて體育も運動でせう、汗が出る位運動さへすれば可い譯です、猪尾太郎なんか、それはもう、毎も汗だら〳〵ですからね、衣物が汚れて仕末におえないですよ』

『單に運動したからと言つて、それが體育になるものぢやありませんよ、體育といふものは、身體の各部を均齊に發育せしめ、四肢の動作を機敏ならしむるにあるのですが、徒の運動ではそれが出來ないです、例へばですね、石蹴は右足の運動にはなりますけれども左足や手の運動にはなりますまい、メンコは右手の運動にはなりますけれども、左手や足の運動にはならないですからね、所がです、體操となると整然總ての機關が平均に運動することになつて居るんです、これ御覽なさい』と木津先生は起上つて、一チ二イ

三ン四ッと掛聲を出しながら、兩手を擴げて上下に動かし、形の如く體操をやる。

『これは兩手の運動です、足の運動は此うやるんですよ』と又一チ二イ三ン四ッと言ひながら足を形の如く動かす。御母様は唯ハア〳〵と言つて見て居る。

先生は尙體操を續けて、

『奥さん、これが一寸六ケ敷いですよ、此ういふ工合に兩手を腰に當てましてね、それから踵で臀を支へ、爪先で此う蹲むのです、力士なんか能くやりますが、子供には一寸出來ないことです、少し爪先が不安定になると直ぐに臀餅をついて了ひます、これは腰の調子が第一の要領ですよ』と説明して居る内に、御自分がひよろ〳〵と倒れさうになつたので、腰に當てゝ居た手を放して、一生懸命に藻掻きながら、空中を掴まうとするけれども、更に手答へがないので、遂う〳〵仰向に轉倒つて了つた。御母様は『まあ危ない』と言つて、傍のお茶盆や茶呑を取片付ける。

『一寸要領を失うと、直ぐこれですからね』と仰向になつたまゝで言つて、

『奥さん此儘ズーッと起上るのは容易に出來ません

よ、此通り足先を一寸上げて、之を下ろす反動で敏く兩手を突出すと同時に體を起すんですな』とだるまのやうに、ヒョッコリ起上りながら、

『此通りです、少しの要領ですよ』と息をはずまして居る。御母様は笑ひながら『御上手ですこと』と感服してお茶を注いで出した。

『夫ですね、學校で體操を止す譯には參りませんが、寢相の惡いのは敎育すると直らんこともありませんね、能く話にもあるでせう、昔の擊劍家なんどが、熟睡中に切付けられた場合に、ハッと起上つて刀の下を搔いくゞつたとか、晝睡をして居る時に、不意に障子の外から突込んだ鎗を、片手でギュッと握止めたとか云ひますね、此樣な事は全く敎育の結果ですよ』

すると御母様は大喜びの體で、

『それでは寢相位が直せないことはありませんね、何卒あなた、一寸敎育して見て下さいませんか』

『イヤ折角ですが、之は中々一寸やそつとではいけないです、劍術家などが此位になるには、少とも二十年三十年の敎育を受けたものですよ』

『それでは何にもなりませんね、猪尾太郎だつて二十

年も立ちましたら、一人手に直つて了ひませうよ』

御母様は又落膽して了つた。

『それなら催眠術をかけて見ては何うです、これならば速成的ですよ』

『へゝえ、それは今日かけると、直ぐ今夜からでも直りませうかね』

『直りますとも、屹度直りますよ、一つかけて見ませうかね』

『あなたがおかけなさるの』と御母様は驚いた眼で先生を見た、先生は『えゝ』と澄して居る。

『催眠術はかけ損うと馬鹿になるとか申しますね』御母様は先生の手腕では少々不安心といつた様子だ。

『ナニ其様なことはありませんが、人に依て術がかゝる人とかゝらない人とありますね、早速一つやつて見ませう、猪尾さん此處に來て御覽なさい』

僕は怖わ〳〵ながら先生の傍に寄ると、仰向に轉ぶんださうだ。すると先生は僕の傍に坐つて、僕の右手を左手で、左手を右手で、確と握り締めて、怖い眼で僕を睨めながら、僕にも先生を睨め返せといふ。そこで暫らく睨めつくらをして居る内に、先生は額から汗をたら

たら滴らして居る。僕は今にかゝるか〳〵と思つて氣が氣でない、先生は益々眼を怖くして汗を滴らす、其内に僕は何だか此う目がだるくなつて、欠伸が出て來たから、一生懸命に齒を嚙み締めると、欠伸の奴、眼から脱けあがつて涙が一杯溜まつた。涙を拭かなければ氣持が惡いから、一寸手を放して下さいと言ふと、先生は六ケ敷い顏をして、一層堅く握り締める、仕方がないからジッと堪えて居ると、又欠伸がやつて來た、今度は失敬して一つ大きなやつをしてやると、先生は急に手を放して『欠伸をしては不可ない、これで全くやり損なつて了つた』と汗を拭きながら、『奥さん水を一杯下さい中中疲れますからなア』

『彼樣に睨めては眼が痛くなるでせう』と御母樣は水を注いでやる。

『ナニ眼は痛くありませんが、全身に力を込めるのですからね』と水を飲んで、煙草を一本喫つて、又術に取かゝつたが、暫くすると今度は小便が催して來た、出來るだけは我慢して見たが、最う早や漏りさうになつたから、思はず顏をしかめると、先生もしかめて一層眼を光らした。僕は最う下腹が張り切れさうで、痛くなつ

たから、臀をもぢ〳〵して居る『と猪尾太郎ッ、何故お臀を動かすんです、じつとして居なさい』と火鉢の傍から御母様が奴鳴る『だつて小便が出たくつて仕様がないんだもの』と言ふと、先生はホッと太い溜息をついて、不承〳〵に手を放した。僕は飛んで行つて小便を濟まして來ると、御母様が『小便位我慢しなさい、お前は横着で先生の仰る通りにしないから駄目ですよ、もつと氣をお注け……』と叱る『何様に氣を注けるんです』と訊くと『ぢつと私の顔を見詰めて、眠を催ふすやうにするのだと先生が言ふ。それでは今度は大丈夫氣を注けますと言つて、又仰向になつた。今度は一生懸命に眠を催ほすやうにしやうと思ふけれども、中々眼が冴えて、何うしても眠られない。意地の悪い眼だ、眠つて不可ない時分には眠くつて仕様がない癖に、眠らうと思ふと決して眠られない。悶えれば悶える程駄目だ、それでもぢつと先生の顔を見詰めて居ると、段々に先生の顔が遠くなつて、眼は眼、鼻は鼻、口は口と別々に分解して眼に這入る。尋常に揃つて顔にクッ着いて居る時分だと、先生の顔だつて、全く問題にならんといふ程度のものでもないが、此通り一つ〳〵顔から取り放して見

ると、その無恰好さ加減と言つたら、實にお話になつたものぢやない、これが人間の顔の道具とは、如何に最負目に見ても信じられぬ位だ、僕は全く見外れて了つて、初對面の氣がした。顔の道具は唯これだけか知らん、モ少し賑のやうだつたがと思つて見廻はすと、一寸きくらげのやうなものが見付かつたね、人間に此樣物があつた筈か知らんと、能く見るとそれが耳朶なんだ、恰度ゴムか何かで拵えて、クッ着けたやうな樣子をして居る、隨分凝つた細工だ。考へると此奴のお蔭で、僕等は如何程の苦勞をするか知れない聞分けがないとい

つては叱られる、命令を聞かぬといつては、小突かれる、能く聞いて居れといつては、眼を動かすことも、口を曲げることも禁められる、耳のお蔭で眼や口も隨分迷惑だらう、全體此樣物を二つも拵える法があるもんか、此奴さへなければ僕等は、學校に行く必要はないんだ、學校は色んな事を聞きに行く所だからね、此樣厄介な者は取つて了つて、其代りに口を今一つ穿けると可いんだ、併し此上大人に口が殖えやうものなら、小言が五月蠅くつて仕樣がないから、子供だけに穿けるんだ、吾輩子供は食べることが役目だからな、お正月やお祭とな

ると何うも一つ位では不足だ、生憎下の方には穿ける場所がないが、幸ひ額が空いて居るから、其處に一つ便利な口を穿けると可いだらう、全體目下のやうでは口は喋りもしなければならんし、飲み食ひもしなければならんし、餘り役目が重過ぎるのだから、今度は分業法をやつて、下の口では喋る、上の口では食べるといふことに定めるんだ、イヤ然うすると食物の香氣が嗅げないといふので、鼻が抗議を申込むだらうし、眼だつて雫が滴るといふので、默つちや居まい、矢張り下の口で食べて上の口で喋ることにするんだな、唾が飛ぶので眼

が少々不平だらうけれども、眉といふ生墻があるから、大した事もあるまい。さア此うなると食べながら喋つて可いのだから、御母様に叱られる心配はないんだ。次ぎに眼の形と鼻の恰好を一定したいものだな、目下の所では、圓い眼もあれば三角な眼もあり、豚の目のやうなのがあるかと思へば、狐の目のやうなのがあり、又ドン栗眼、金壺眼、蚤取眼もあり、其他色目、ながし目、藪白眼なんどゝいふやつもある。鼻には獅々鼻、團子鼻、二段鼻、鳶鼻なんど、色んなのがあつて、一寸の加減で美人ともなれば醜婦ともなる、クレオパトラの鼻が今一厘

程低かつたなら、今日の世界歴史は全部變更せられなければならぬ位ださうだが、勾當内侍の鼻が一厘程右か左に曲つて居たら南朝も亡ばなかつたかも知れぬ、淀君の鼻が今一厘程仰向いて居たら、德川家康は平大名で終つたか解らぬ、此樣物騷な鼻なんどを、自由競爭に放任して置くから、社會主義なんといふものが興つて、文部省でも餘計な苦勞をしなければならぬことになるのだ、それだから眼や鼻も國定にして了つて、劃一の政策を施さなければ不可ん、といふやうな事を考へて居ると、先程から先生の髯先に止まつて居た蠅が、美

味ものにも有り付かなかつたと見えて、此髯は駄目だといつた風に首を曲げて、僕の眼尻に移つて來た、此野郎と瞬を一つやると、ブンと飛び上かつて、今度は口端に來て止つた、もづ〳〵して仕樣がないから、思ふさま口を歪めてやると、今度は先生の鼻頭に飛んで行つて、無性に前足を擦り合はせ、頭を三度撫で廻はして、扨てこれから一稼ぎといふ所に、先生がビクッと鼻皺を寄せたので、又々僕の鼻の穴の這入口に來て、しきりに其處をつゝき初めた。僕は二三度鼻息を吹掛けて見たけれども中々逃げない、今度は上唇を口の中に卷き込

み加減にして、下唇を充分に突出し、息をフッと吹き上げると、野郎、鼻の穴にもづ〳〵ッと這込んで了つた。

僕はワッと言つて、先生の手を無理に振解きながら、飛び起きて、鼻をクッ〳〵とやつて居ると、御母様は小さい聲で

『かゝりましたか』と先生に訊く。

『いゝえ』と先生は笑ひながら『何うしたんだ猪尾さん』

僕はぐづ〳〵して居られない、蠅の奴、益々奥に這込んで行くのだ、鼻をクッ〳〵とやつて、無我夢中に穴をほじくつて居ると、御母様は、

『木津さん何うかしましたか』と稍々驚いた體。先生は『

『なアに、鼻の穴に蠅が飛込んだのですよ』と言つて僕の鼻の穴を覗きながら『直ぐ其處に居るんだよ、早く鼻汁をかみなさい、譯なく出るんだから』

僕は一生懸命に鼻を摘んで、動きの取れないやうに蠅を壓えながら、御母様に紙を頂戴と言ふけれども、鼻を摘まんで居るので、それがカビを頂戴と聞える。

『カビは何だよ、カビは』と御母様はうろ〳〵する。

『カビだ、よカビカビ、早くさ』

『紙でせう』と先生が言ふ、そこで僕が默頭いて見せると御母様は笑ひながら、

『嫌な子だね、紙なら紙と尋常に言へば可いぢやないか』とやつと紙を與れる。大急ぎで強く鼻汁をかむと、蠅の奴、鼻汁の中で一生懸命に藻掻いて居あがる。僕は此奴と一喝して『見て御覽』と御母様に差出すと『汚ないねえ、其樣なもの見なくつても可いよ』と顏を背ける。先生は『鳥渡見せて御覽』と僕から取つて、不思議さうに眺めて居たが、

『矢張り足が六本あるね』と言ふ。

『何故でせう』と僕が訊くと、

『昆虫類だからです』と尙見入つて居る。『此奴の心理を解剖すると、今や悔恨の情と悲哀の情と驚愕の情と恐怖の情と混合して起つて居るね、そして一方には如何にして逃るべきかといふ智が働いて嘗て竊にくつ着いた時は一生懸命に藻掻いたら甘く逃れた、此鼻汁は恰度竊のやうだ、故に一生懸命に藻掻くと逃れることが出來ると此樣な斷定を下して、今は之を實行するために意志が働いて居るのだ、所が今度は竊とは少々譯が違ふのだ、此樣な工合に紙に撚り込んで了へば往生だ、前提を間違つて居あがるから仕樣がない、矢張り虫は虫だけの考さ』とポンと庭に捨てゝ了つた。催眠術も何もお流れさ。

四　フロック新調の計畫

夕食を濟して、戸外でお隣の金ちやんと遊んで居ると、根津先生がやつて來た。頭髪を綺麗に撫付けて、スツキを待て、卷煙草を吹かして、氣取つた歩行ぶりだ。此先生は醫師志願で、既に前期の免狀を取つて居るが、頭髪を大切にすることゝ言つたら、全く免狀以上だね、

綺麗に撫付けた時だと、屹度帽子を被つて居ないなんと來ちや、振つたもんだ。『猪尾さん』と先生僕の方に寄ツて來て訊いた『御母様はいらつしやるかい』

『極まつてらあ』僕は此う答へたね、實は口から出任せなんだ。すると先生、

『何と極まつてるんだ』といふ。僕は構はず、

『何とでも』と言つてやつた。すると今度は、

『姉様は』と訊く。此先生は要もないのに、毎も姉様の事を訊くのが癖だ。僕は五月蠅から、

『姉様が居るもんか、大森の伯母様とこに行つたんだ』

と僞言を言いてやると天罰と云ふものは恐ろしいね恰度姉様がお使に行つて、其處に歸つて來たもんだ『これ猪尾さん先生に向つて何んです』と姉様は先づ僕を白眼めて置いて、先生に會釋すると、先生の奴、それ見ろと言はぬばかりに、大威張で屋内に這入つたが、一寸立戻つて『好いものを與げるからおいでと』僕を招んだけれども、僕はいま〳〵しいから、知らん顔をしてやつた。デモ何を持て來たのか氣になつて仕樣がない。此先生のケチな事は疾に承知の上だから、大したものぢやあるまいとは思ふけれども、今日は陽氣が暖かいから

何様に氣が違つたとも限らないと考へると、最う早や氣が氣でない、そろ〳〵歸つて見ると、先生の奴、燒芋を貳錢許り、猫臺の上に並べて、御母様と姉様を相手に、何かべら〳〵喋りながら茶を飲んで居る。陽氣は變つても、相變らずケチな先生だ、僕は落膽りして仕舞つたね。それでも口の奴が食べたがつて、口唾なんか滴らして居あがるから、いきなり一つ摘んでやると『まあ亂暴だねえ』と姉様が一寸白眼めた、それでも御母様が默つて居たから、モ一つ取つてやれと思つて、手を差出したら、御母様が莨を詰めかけて居た煙管の雁首が僕の

手の甲目がけてコツンと來た、心得たりとヒヨツと引込ますと、猫臺の板がカタン。一同がドツと笑ふ、猫臺こそ好い災難さ。

御父様はフロックコートを着て、何處かに出かけて行つた。すると先生の奴、大威張であぐらをかきながら、

『校長も隨分忙がしいですね』

『何うもお交際が面倒でねえ』と御母様は顏をしかめる。

『交際は大にやるべしです、今の世中は何でも彼でも

運動ですからね』

『全くですよ』と御母様は直ぐに賛成した。僕は運動といふのは體操のことか知らん、其れにしては御母様の賛成するのが少しおかしいと思つて居ると、

『デモ良人は運動が下手でしてね、中々臀を動かしませんよ、それでも區長さんの許へは月に二回、學務委員の方で、引田さんの許へは二回、其餘は一回づゝ、それに區會議員の方で三人、市會議員の方で二人、此五人には一回づゝ、是だけは何なことがあつても、決して缺さず御伺ひすることに定めて居るんです』と語つて居る。話の樣子では體操ぢやなくつて散歩だね。

『校長も少し臀が重い方ですね、もつと手を擴げた方が可いですが、それにしても校長はフロック一つ奢らなくちやなりませんね』

すると、姉樣は大賛成と言つた風。

『全くですわ、御父樣のフロック丈は何とかして頂載よ、ねえ御母樣、妾恥かしくつて冷汗が出てよ』

姉樣も自分一人のさへ恥かしい思が仕きれないと言つてる癖に、其上御父樣の分まで引受けちや、荷が重くつて汗も出やうさ。

『フロックはお前、惡いのでも四拾圓は要りますよ、此節は諸色が上がつたからね、御父様のは一本綾の上等だけれども、拾八圓で出來たんだよ』

『驚きましたね、それはいつ頃の話です』

『さうですね、私達が一緒になつた時ですから……』と御母様は考へて居る、一寸では勘定も出來まい。

『オヤ〳〵、それでは鹿さんが十七だから、兎に角十八九年前ですね、能く保存たもんだなア』先生の奴、小鼻に皺を寄せて、鼬のやうな聲を出して笑ふ、平常の癖なんだ。

『良人はお爺さんですから服裝なんか構ひませんがあなたこそお拵らへなさいな』

『御母様あんな失禮な事を、根津さんはもう疾うに出來てるんでせう』姉様は先生が持て居ないといふことを承知の癖に、こんな白らばつくれたことを言ふ。

『僕ですか、僕は目下計畫中なんですから、九月には四拾五圓のやつが出來ます。人間は計畫が肝要なんですからね、僕の計畫は此うなんですよ、先づ下宿料が八圓でせう、それに煙草代が壹圓五拾錢……』

『煙草代は壹圓五拾錢ぢや足りませんわ、あなたは毎

も敷島を召上つてるでせう』と姉様は先生の傍にあつた敷島を指して『そら御覽なさい、其處に敷島の袋があるぢやありませんか』

『其處が策士の策士たる所です、御覽なさい此袋には朝日が這入つてるんですよ』と先生の奴、朝日を一本摘み出して小さい、聲で『極秘ですよ』と附加へた。

『まあ、狡猾のねえ』と姉様は呆れた體。

『狡猾い所が當世ですよ、而かも下宿ではきざみを喫つて、外出の時に限り朝日の敷島を持て出るんです、すると參拾錢の萩が一ヶ月一袋、朝日が二日に一袋

此煙草代金一ヶ月壹圓五拾錢也です、痛快でせう』此先生痛快でせうが口癖だ、伊奴先生が、「何故處嫌はず痛快でせうと言ふのかと訊いたら、醫師には緣起の宜い字だとさ。

それから書籍代ですが、之は新聞や雜誌の廣告と新刊紹介を讀んで、書名と著者と批評とを記憶して置くんです、金なんか出して買ふ必要は有りまんね、新聞は學校に一つ取つてあるし、雜誌は書屋の前に立つたり、友人のを覗いたり、新聞の廣告を見たりして、標題だけ覺えて置んです、是丈の種子さへあれば、臨

機應變で一ト角の學者になれます痛快でせう』又鼻皺を寄せて鼬の聲だ。

『それから交際費ですが、之が亦大に策を要するんです、例へば客を受けるですね、あなた方ならば少くとも煎餅の五錢に茶の一杯は出しませう、吾輩の遣り口は其樣な不經濟で平凡の遣り方では有りませんからね、一體敎員といふものは、正直で、小膽で、貧乏で、ケチです、尤も吾の校長なんか例外ですが……』先生の奴御母樣を一寸見て、又鼻皺に鼬の聲だ、御母樣は苦笑をして居る。

「それで客の顔を見るや否や、此方から大膽に機先を制してやるですね、ヤア君、恰度好かつた、僕はこれから君を誘はうと思つて居た所だ、君堀切の菖蒲が見頃だと云ふぜ、今日は是非見に行かうぢやないか」と言ふと、御客先生忽ち顏色を變へるに極まつて居ます、其時無論君は贊成だらうとと追かけると、最う早や四泥藻泥です、少し體裁を飾る奴だと、行きたいけれども、折惡しく今日は急要が出來て、今出かける所だが、通り路だから一寸立寄つて見たのだ、それぢや失敬なんかんと、直ぐに歸つて了ひますね、愚鈍な奴

だと、羨ましいね、なんか言つて、緩々と卷煙草を摘み出して火を點けにかゝるんです。此樣神經の鈍い先生に遇つちや、全く往生しますね、併し折角煙草に火を點けたんですから、吸つて仕舞ふ間は最う動く氣遣ひはありませんし、又三分間や五分間置いてやつたつて大した損にもなりませんから、其處は交際と思つて諦めます、そして其間を利用して策略を施すですね、君、今日は閑だらうと訊くと、閑だと正直に答へます、それでは金の都合でも惡いのかと訊くと、「今日は少々都合が其の何んだから」と來るです、「何ん

だからでは良いか悪いか分らんけれども、失敬ながら假りに悪いとすれば、それは譯はないんだよ、今日の會計は僕が立替へて置いて可いんだから、そんな事なら君安心し玉へ」と言ふと、普通の人ならば大安心をする所だが、根が正直ですから安心どころの騒ぎぢやありませんや、次の月給日に立替金を拂はんければならぬといふ心配があるでせう、事爰に至れば流石の先生も、緩々とは出來ません、「それは氣の毒だからなア」と言つてる内に最う少々浮腰になりまして、「其樣事を心配しなくつとも可いから、立祝にビールの一二本もやらうぢやないか」と言はうものなら、先生ビールの割前を取られることゝ思つて、あはてゝ立上つて「僕は失敬しやう」と來るですね。そこで今度は「ビールだけでも飲んで行つちや何うだ、朝つぱらから酔つぱらつても何だから嫌か、又の事にするか」なんかんと大略先方の返答まで自分で言つて了ふのです。此うやると何程神經の鈍い先生だつて、まさか一旦立上つたものが、それならば酔つぱらつても構はんからと、着坐るものもありませんからね、それでも先方は非常に感

謝して歸るんですが、これが實際は溫茶の一杯も出した譯ぢやありませんよ、全く計畫一つなんですよ。之を心理的待遇法と云ふんですね、痛快でせう。』痛快だか何んだか知らないけれども、實に念の入つたものだと、僕も感心して了つたね、御母樣と姉樣は無論感心以上だ。

『それから會ですが、之に對しては、哲學的方法を用ふるんですね、全體會と云ふ奴を分類すると、客觀的と主觀的と此二方面から分つことが出來るんです。先づ客觀的に之を分類すれば、第一研究會、第二懇親

會、第三送別會、第四歡迎會、第五祝賀會、第六追悼會、第七同盟會、第八運動會、第九慈善會、先づ此んなものですね。之を主觀的に分類すれば、第一自己廣告會、第二自己防禦會、第三自己損失會、先づ此三つに分かれるんです、だから出席して損が行くのは第三の自己損失會だけですね、之に屬する會は即ち第一慈善會これは言ふまでもない、それから送別會、これは別れやうといふものに御馳走するんだから矢張り損ですね、それから追悼會、これも死んだものに盡すのだから勿論損です。併しこれとても間接には自己廣

告ともなり、自己防禦ともなる場合が無きにしもあらずですから、要するに大した損失さへなければ、總ての會に出席するのが可いです。併し之には容易ならぬ資本がかゝりますからね、吾輩の研究すべき問題は、如何にすれば最小額の會費を以て、最多數の會に出席することを得るかと云ふにあるんです』

『まあ六ケ敷さうな法ですね、其樣な事が出來るんですか』と御母樣が眞面目に訊く。

『出來ますとも訳はないですよ、僕は三年前から研究して居るんですが、研究中は差當り總ての會に出席見合はせて居るんです』と先生の奴、至極眞面目だ。

御母樣と姉樣はオヤ〳〵と云つて居る、僕は狐につまゝれたやうな心地さ。

『まあ此んな工合ですからね、生活費は月に拾五圓で結構です、それで今年の一月から一ケ月參圓づゝフロック基金として貯金することにしました、痛快でせう』

『一ケ月參圓ばかりでは、九月迄に四拾五圓は貯りませんわ』と姉樣が言ふ。

『鹿さんは感心に計算が早いね、併し未だ一を知つて

二を知らないんだ、八月と云ふ月は君、何樣月と思つてます、月給拾八圓は取德の休暇と來て居ますよ』

『學校は休んでも、下宿料は休みませんよ』と姉樣がやり返へす。

『全く、併し計畫は其處にあるんです、八月中は某家から家庭教師といふ辭令を頂戴して、逗子の別莊に行くんですよ』、と先生得意滿面で、鼬の聲を張上げた。

『まあ結構ですね、能く家庭教師の口が見付かりましたこと、誰方の別莊？』と御母樣が訊く、

『此處まで漕ぎ付けるには、隨分骨が折れたんですよ、去年の十月頃から好い家は無いかと氣を付けて居ると、生徒の中で一寸物になりさうな奴を見付かつたんです、それから段々家庭の樣子を探つて見ると、其家庭は後家さんで、富豪で、而も幸なる哉、其生徒といふ奴が大の野呂間と來て居るんです、注文通りでせう、そこで吾輩必死の智惠袋を絞りましたね、先づ初め一ヶ月といふものは其生徒の通信簿に劣等の續打をやつたんです、すると果たせる哉、番頭が反物を持て僕の下宿に來ましてね、吾家の坊ッちやんは記憶が惡るくて仕樣がないから、何卒宜しく賴むと

云ふ譯でせう、僕は家庭の樣子など尋ねて、後家さんと云ふことを始めて知つた風に裝ひましてね、それは御心配です、誠に同情に堪えません、昔から母親育ちの子供と云へば、エテ間違ひの多いものですから餘程御注意なさらんと不可ませんよ、實は私も十八歳の時に父親に分かれたんですが、十五、十三、八つと云ふ弟妹が居ましてね、父親に先立たれた母親の苦勞といふものは、實地に能く知つて居るんですよ、それで私も女親の家庭教育と云ふことに就ては、充分に研究してるんです、御家の坊ちやん御一人に特別

の教授をするといふ譯にも參りませんが、同情に堪えませんから、成るべく氣を注けて上げることに致しませう、それに御家の坊ちやんは消化不良のやうですが此の消化不良と云ふものが、記憶力を無くす原因ですから、衞生に餘程御注意なさらんと不可ません、實は私の專門は醫學でして、教員は一時の腰掛にやつてる次第なんですから、衞生の事に就ても、以後は通信簿で時々御注意申上る事に致しませう、なんかんと親切に挨拶しましてね、反物は斷然謝絶したんです、それからそろ〳〵通信簿に手心を加へて

漸々に中等となし、遂に優等に進めたんです、父兄なんと云ふものは通信簿の成績さへ良ければ安心してるんですからね、所が此一月に其生徒が番頭を連れて年始に參りましてね、歌がるたをやるから、是非遊びに來て呉れと云ふんです、堂摺連ぢやないが、待つてましたと云ふので、直ぐに出かけて行つて、甘く後家さんの機嫌を取つたもんです、すると僕が醫學をやつて居るといふ事が非常に御意に叶ひましてね、夫れからと云ふものは豪い御信任で、此八月の休業の如きも、女親の手にかけて置いては、折角良くな

つた成績が又後に戻るかも知れないし、それに夏季だから一層衞生に注意しなければならんと云ふので愈々僕が隨行して別莊に行くことに定まつた譯なんです、そこで一月から七月までの貯金が三七の貳拾壹圓、八月の給料拾八圓、家庭教師の御禮が察するに拾圓、其内四圓を小使錢と見て、以上合計四拾五圓也です、何うです鹿さん、痛快でせう』と來たもんだ。

御母樣と姉樣は『まあ感心ねえ』『感心だことねえ』と無暗に感心して仕舞つてる、先生の奴、大得意で鼻一杯に皺を寄せながら、止め度もなく鼾の聲を出す。僕も

少しは感心したけれども、考へて見れば今はやつと四月だから、これから九月と云へば尚中〳〵だ、それよりも金ちやんの御父様が豪いと思つたから、

『金ちやんの御父様は、相場で一日に五千圓儲かつたつて云ふぜ、先生も相場をやつたら、モツト早くフロツクが出來らァ』と言つてやつたら、先生の奴苦い顔をしたね。

五　小石で人殺し

四月末の日曜日なんだ、七時頃起きて見ると、姉様は

學校の運動會に行くと云つて、最う整然お化粧を濟ましし、御母様に手傳つて貰つて仕度をしながら、衣物が粗末だと言つて、グズ〳〵不平を並べて居る。何様な衣物かと思つて覗いて見ると、昨年の運動會にも天長節にも新年にも着た例の奴さ、これぢや姉様の不平に無理もないんだ、羽織も袷も御母様のお古を染め直したものだからね、夫に半襟は御母様が十八の時代買つたといふ奴だ、御母様に言はせると、流行は十年毎に繰り返すもので、今は又恰度これが流行つて來た所ださうだが、すると御母様が買つてから、これで三度だけ流行

に遇つたといふ譯だ、半襟も此位長生すれば遺憾ある
まい。併し御母様も少し浮かぬ顏で、此樣な事を言つ
て居る『人間は身に錦を着なくつとも、心に錦を着て居
れば可いです、他人の服裝なんか決して羨むものぢや
ありません、お隣の花ちやんなんか身にこそ錦を飾つ
て居るけれども、學校では落第ばつかりしてるぢやあ
りませんか、あれではお嫁に貰ふものだつてあるもん
ぢやない、あの娘なんか親が相場師で、敎育の事なんか
少しも知らないものだから、我儘の言ひたい放題で、學
校で落第するのは耻かしいと思はず、衣物ばかり買つ

て鼻を高くしてる、あの娘は何程良い衣物を着ても、品
といふものは少しもありやしない、それは心に錦を着
て居ないからです、相場で金儲したつて威張れるもの
ぢやない、つまり博徒だもの、吾の御父樣なんか、國家の
爲めに天職を奉じて居らつしやるんだから、お金なん
か無つても、耻かしい事は少しもありません、花ちやん
なんかには威張つてやつて可いです』と、僕は實に驚い
たね、金ちやんの御父樣は豪いと感心して居たら、あれ
で博徒だとさ、人は見懸に依らないものだ、髯を生やし
て立派な洋服を着て、人力車に乘つて居たつて、怖いこ

とがあるもんか、今度金ちやんに會つたら拳固を食はしてやらア、僕なんか心に錦を着るぞ、衣物なんか構ふものかと思つて、戸外に飛び出して見ると、金ちやんとこの犬が居た、此の畜生と石を投げ付けてやると、足に當つたと見えて、恐ろしく鳴きながら、跛足を引き〳〵逃込んだ。すると金ちやんが出て來て『誰だい、宅の犬を打つたのは、猪尾の馬鹿野郎、御父様に言付けてやるから覺えて居あがれ』と毒づいたから、僕だつて負けちや居ない『何だと、金の弱蟲、貴様の御父様なんか怖いもんか、相場で儲かつたつて威張れはしないぞ、博徒ぢやないか、身に錦を着たつても、心に錦を着なくちや駄目だ、ヤイ弱蟲の落第坊主』と石を拾つて投げやうとすると、弱蟲の野郎『乞食、乞食』と逃口をたゝいて引込んで仕舞つた。僕が押かけて行うとすると、後から『猪尾太郎ッ』と怒鳴られた。冷ッとして振返ると、御母様が怖い目をして『一寸おいでと』言ふ。これは失敗つたと後悔しても早や追付かぬ、怖わ〳〵ながら屋内に這入るといきなり頭をピシャッとやられた。御父様も六ケ敷い顔をして居たが『これ頭を打つては不可ん、腦でも惡るくした日にや何うするんだ』と意外にも御母様を叱か

つた、僕は萬歳と思つたね。

『だつて、餘まりぢやありませんか』と御母様はさも腹立たしさうに息をはづまして居る。

『あんまりでも何でも、子供の頭を打つては不可ん、醫を打つもんだ』

『妾だつて腦を惡るくする程打ちは致しません、其様な事を仰るなら、良人が能く躾けて下さい、良人が毎も其様なことを仰るものだから、子供が妾を馬鹿にするんです』

と御母様は餘程激昂した語氣。御父様は、

『兎に角子供を打つなんて野蠻極まる』と、煙管が折れる程、火鉢の縁をはたく。僕はギョッとして頭を撫で乍見たら、幸に自分の頭には異狀がない。

『良人は教育家の癖に、何うして然う構はず屋でせうねえ、可愛い子は打つて泣かせと言ふぢやありませんか、甘くして置くと增長して、何様な事を仕出來すか分つたものぢやありません、子供の喧嘩だと云つて馬鹿にはなりませんよ、石なんか投げて、若しか當り所でも惡くつて御覽なさい、一打で死んで仕舞ひますよ、さうした時にや良人、人殺ですよ、教育家の癖

に、自分の子供に人殺をさせて、世間に申譯があるでせうか、それに子供を殺された親の身になつて御覽なさい、病氣で死亡つたのは諦めの法もありませうが、むざ〳〵と殺された日には何うして諦めませう、妾だつて此子が人殺になつて、監獄に送られやうものなら、それこそ生きちや居られませんよ、此子が監獄に送られたり、妾が死んだりするのも、全く良人が子供を甘くなさるからです、良人が手を懸けて妾を殺したも同一ですよ』

『豆粒のやうな小石で人が殺せりや譯はない、殺してから其樣事をお言ひ、馬鹿なッ』御父樣もむきになる。

『殺して堪るものですか、何うして良人は然うなんでせうねえ』と御母樣は先程から詰めて居た煙管にやつと火を點ける。僕は此の間にソッと顏を洗つて、裏庭で裏隣の猫に石を一つ打つ付けて這入つて見ると、姉樣は顏を膨らして、花ちやんを誘ひに行く面目はないから、何うしたら可いだらうと言つて居る、御父樣と御母樣は、眞逆聞えはしなかつたらうとは言つて居るけれども、それでも眉をひそめて居る。其所に花ちやんが誘ひに來たので、姉樣もやつと胸撫で下して出かけ

た。

一同は其の後で朝御膳に着いた。虎ちやんが見えないから、何うしたのかと思つて居ると『御母様、ウンコが出ました』と言つて便所から出て來た。虎ちやんは去年お隣の梅ちやんが死んでからは、大便が出たか出ないかを、毎日必らず御母様に報告することになつて居る。其の理由は梅ちやんが急に病氣い初めたとき、醫者に見せたら、一週間も大便が結して居たさうだが、それが病氣の原因であつたといふからだ。所が今日は生憎御飯時と來て居るので『馬鹿なことを言ふのぢ

やありません』と御母様に叱られて了つた。併し虎ちやんは御飯時なんと云ふことに氣が付くものぢやない『だつて出たんですもの』と不平らしく言つて居る。『馬鹿なことを言はずにサッサと御飯をお食べなさい』と言れて、默つて食べ始めた。僕は今は叱られるかと思つて、御飯の味も解らないで、びく〳〵して居ると、ツイお椀の縁から味噌汁を少し滾して了つた。御母様は直ぐに目を光らして『これッ猪尾太ローオ、お前は何うして此う馬鹿なんです、最つと氣を注けなさい、寢相と云へば座敷一杯轉び廻るし、金ちやんに石なんか投げ

るし、味噌汁は滾す、實にお前見たやうな御行儀の惡い子はありませんよ、心に錦を着てるもないもんだ、お前は心に襤褸を着てるんです、虎ちやんを御覽、妹でさへ整然として食べるぢやありませんか、大きな身體をして何です』すると虎ちやんは大威張で『兄さん馬鹿だね、妾お悧巧よ、御母様見てゝ頂戴』とお椀を持て吸ひながら『ホラね、滾さないでせう』と來る、『ヨシ〳〵お悧巧お悧巧』と賞られたものだから、益々圖に乘り、又お椀を持ながら『御母様見てゝ頂戴』といふ。デモ其樣は好事ばかり續くもんぢやない、今度は御母樣が、ヨシ〳〵と言

た限り振向いてもやらない。虎ちやんは『御母樣ちよいと御母樣てば、ヨーちよいと……』と御飯を休止んで呼立てる。すると兎耳坊も、自分だつて虎ちやん位の事は出來るんだといふ勢で、御母樣のお椀を取上げながら母チヤン〳〵と御母樣の袂を引つ張る『五月蠅ねえ、御飯の時は默つて食べるものです』と二人ながら白眼つけられた、虎ちやんの奴、折角賞められたのが何の役にも立たない、好い面の皮だ。兎耳坊は御母樣が御飯を入れてやつた茶呑を持つて、立ながら摘み込んで居たが『兎耳坊お坐りをしてッ』と膝頭をピシャッ

と打たれて『ウン』と返事して坐つたが、半分間も立つたかと思ふと、最う両足を投げ出しながら、御父様の御飯を敏やく摘み出して、口一杯に頬張つた。御父様は『此野郎怖しい早い奴だな』と感心して居る。『これ整然と坐つてッ』と御母様に白眼まれて、又『ウン』と返事して坐つたが、いつの間にか虎ちやんの後に行つて、虎ちやんが食べて居る御飯茶椀から、敏やく一握み口に入れて了つた、虎ちやんは呆氣に取られて居る。

『全體此の子は一度に何程位御飯を食べるんだ』と御父様が訊く。御母様は

『左様ですね、餘程食べませうね』と氣の無い返事をして居る。

『餘程と云ふと幾らだ』

『さあ幾ら位ですか』

『お前は毎日食べさして居て、それを知らんのか』と御父様は稍聲が高い。

『冗談ぢやありませんよ、其様な事を勘定する段ですか、お行儀一つ敎へるにさへ此の騒ぎですもの』御母様もムッとした體。

『お行儀なんか何んだ、年を取つて自分で恥かしいといふ氣が出ると惡るくしろと云つても、自然に能くするんだ、そんな無益ないことを敎へる間に、御飯の分量でも一定して食べさせるやうにするが可い』

『御飯だつてお腹が空くと、食べるだけ食べなければ承知しませんよ、お行儀なんかと仰るけれども、良人兎耳坊は幾つになると思つて居らつしやるんです、三歳ですよ、三歳子の魂百までといふぢやありませんか、今敎へて置かなければ、一生善くなりつこはありません、御飯の時に足を投げ出して坐つたり、摘み食ひをしたり、其の上人の物を盗むなんテ、實に大變

ぢやありませんか、此の子は盗むのが敏しつこいから、打放つて置くと掏摸になるか解つたものぢやありませんよ、良人は教育家の癖に、能くまあ其様な呑氣なことが言つて居られますね』

『馬鹿なッ、鹿子だつて三歳の頃はこれだつたんだ、でも今では足も投げ出さなけりや摘食ひもしず、掏摸をする所か、過日は紙入を掏られたぢやないか』

『鹿子だつてあれまでにするには、何程位妾が骨を折りましたか、未だ其頃は一人で充分に躾けることが出來ましたから彼様なんですよ』

『打放つて置いても、眞逆足を投げ出して坐はりやしまい、併し鹿子が今でも始終胃が弱いのは、子供の時に食物を亂暴にやつたからなんだ、少しは物の輕重を考へたが可いだらう』

御父様と御母様が此様な押問答をして居る間に、兎耳坊はちやぶ臺の中央に置いてある菜漬鉢に目をつけて、手をやつて見たけれども屆かないので、今度はちやぶ臺に這上らうとして居る。御母様が「これッ」と言つて臀をしたゝかに打つと、ワッと泣き出してのけぞりながら仰向に倒れて、兩足でちやぶ臺の脚を蹴つた

ものだから堪らない、一同の味噌汁がだら〳〵と滾れた。

『これですもの良人、少しはお行儀を躾けなくちゃ何うしませう、物の輕重と仰るけれども、子守も居ない家庭で、食事の分量を一定するなんか、とても相談になりませんよ』

今度は御父様も苦笑をして押默つて了つた。僕は此際ぐず〳〵して居やうものなら、又何樣な事で叱られるかも知れないと思つたから急いで箸を投げ出して戸外に出て了つた。

六　自然主義教育論

戸外で金ちやんと出會したら、彼の野郎今朝の事を意恨に持て居て、『貴樣は僕と同年で居て、漸と五年生ぢやないか、僕ら六年生だぞ』と威張て居あがる。これには僕もギャフンと來たね、實は僕は金ちやんと同年で、おまけに角力だつて競走だつて、ずつと僕の方が強いのに學校では僕の方が一年下だ、僕は不平でならないから、御父樣に訊いて見やうと思つて、屋内に飛込んで見ると、御父樣は雜誌社の字間さんと碁を打つて居る、

僕は構はず御父様の側に行つて『ねえ御父様、『金ちやんは僕と同年で、僕よりかも弱蟲の癖に、何故六年生なの』と訊くと、『ヤツ失敗つた、切られましたね、こりや一寸待つて呉れ玉へ』と御父様は一切夢中だ、少々負氣味と見える。『ヨー御父様、何故ですヨー』と言ふと、『何んだ』と云つたきり、碁石を膝の上でいぢりながら、眼は尚碁盤の上から放れない。今度は『ヨー御父様と』肩を搖ぶつて見ると、『何んだ五月蠅、……其石を擧げられちや、何とも早や仕樣がない、』と指先を震はせながら、『これッ邪魔だからモツト退いてお在で』と邪慳に僕の胸を突除けた

ので、僕は仰向に轉倒へる途端に、折膝をして居た足が、バネのやうに碁盤を彈いたから堪らない、それが生憎松か何かの薄い盤と來て居るので、三度許りとんぼがへりを打つたもんだ。お父様は憤つたの憤らないのぢやない『馬鹿野郎ッ』と怒鳴つて傍にあつた長煙管で折れる程僕の臀を打た。僕は起るのもきまりが惡いので、其儘臀を擦つて居ると、宇間さんは碁石を拾集めながら、『可いです〳〵構ふもんですか、猪尾さんは御父様に何を訊いて居たの』と言つたから、其を機會に起上ると、宇間さんがお盆の煎餅を三枚取つて與れた。御父様も僕を打つた煙管で、一服吸つたら機嫌が直つて、『何か用だつたのか』と言つて笑つて居る。僕は新ため て金ちやん一件を訊くと、御父様は宇間さんに向つて、

『金ちやんといふのは三月卅一日生で、此子は四月一日生だもんで一年違つて了つたのですな、早く九月學年でも始めれば可いと思ひますが』

僕は殘念で堪らなかつたね、金ちやんが三月卅一日生で僕が四月一日生と云ば、たつた一日の違だ、その一日だつて、金ちやんは午後十二時に生れて、僕は〇時一分に生れたかも知れぬ、然うすればたつた一分間の差

で金ちやんは六年生、僕は五年生といふ譯だ、此樣馬鹿〳〵しい事があるもんか、其樣不公平の事をしなくとも、角力を取らして勝つたものから順々に入れる事にすれば可いぢやないか、然うすれば金ちやんなんか九つになつたつて、這入れつこはない、僕なんか今時分は疾うに卒業して了つてらア、殘念だなアと思つて居ると、宇間さんも鳥渡面白いことを云ふ。

『九月學年なんか始めた所で、僅か半年の違ひぢやありませんか、金をかけ手數をかけてやる程の事でもありますまい、其れよりも兒童が是非滿六歳になら

なければ、就學することが出來ないといふのが、全體窮窟過ぎるですね、文部省の官僚輩は、兎角法令萬能主義だから困るんです、假令法令を拵らへるにしても、モット餘裕のある法令を拵らへて貰はんければ』

『でも就學年齡を一定するといふことは、各國皆然うですからね、之は仕方がありますまい』

『外國なんか何樣でも可いぢやありませんか、我國は我國です、要するに文部省が干渉し過ぎるんですね、實に非立憲極まる話です』

『成程ね』と言つたきり、御父樣は默つて了つた。宇間

さんは大和を一本摘み出して、碁盤の隅で吸口をトントンとやりながら、

『兎に角現時の教育は、法令とか規則とか教授法とか云つて、實に其煩に堪えんですね、それで僕の雑誌では自然主義の教育を唱道して居るんです』と言つて、煙草に火を點けて一服スーウと吸つた。

『自然主義の教育といひますと？』御父様が訊くと、宇間さんは四十五度に突出して居る前歯をポカンと開けて、ハーッと煙を吹きながら、演説口調で、

『自然主義の教育といふと、即ち無理想、無目的、無技巧無脚色主義である、苟くも全智全能の造物主が、周到なる注意と微妙なる作用に依て作つた、此の活きた人間を凡夫の教育者輩が、粉細工でもする氣になつて、如何に作り上ぐべきか、此の如く作り上げざるべからずなんどゝ詮議するのは、僭上と言はんよりは寧ろ滑稽である』

『成程、それで其の自然主義といひますと、矢張りその姦通だとか、野合だとかやるのですかな』

『矢張り其れをやるですね、併し文藝に現はれたる自然主義と、教育に現はれたる自然主義とは、精神は同

一でも形が違ふのです、例へばソクラテースの教授法などは野合的ですね、ソクラテースは野に於ても山に於ても更に處嫌はず、生徒に出會つた所で教授したのですからね』

『ハヽア之は珍説ですな』と御父様は首を傾けた。

『それに所屬の級も所屬の學校も一定しないで、兒童の氣が向き次第に、何の級何の學校に行つて習つても構はんのですから、そこは姦通的ですね』

『これは驚きましたな、其樣事で兒童は學修することが出來ますかね』

『出來ますとも』と宇間さんは吸殼を火鉢に差込んで、

『そこが自然主義で、浮氣は其日の出來心的に、教科に連續といふものはないです、一教授時間に一事項を教授して了ふのですから、何の學校に行つて習つても夫丈習ひ德です、又級なんか定めなくつても、例へば爰にお伽噺をする教員と物理學を教授する教員とあるとしますと、七八歳の幼兒は自然お伽噺の方に集まりますし、お伽噺も散々聞き飽いて、少し高尚の智識慾が起つて居る兒童は、自然に物理學の方に集るものです、然うすると貴樣は四月一日生だから

六年生だ、貴樣は四月二日生だから五年生だといふやうに束縛しなくとも可い譯です』

僕はこりや奇拔だ、珍無類だ、角力を取らせるのよりも、此方が手がかゝらないで優かも知れん、おまけに、メンコを敎へる先生があらうものなら、最う此上なしだと思つて聞いて居ると、尙〳〵好いことがあるね。

『それで敎科書は一切廢止するのですね、敎科書なんか持たせる必要は決してありません』と來たもんだ。

僕は敎科書全廢と聞いて實に嬉しかつたね、敎科書さへなければ學校は樂なものだ、別に何にも稽古するものは無いのだからね、其上敎科書を廢すると、先生も入用はないだらうから、小言を言ふものもなければ頭をコツンとやるものもなくなつて、實に甘い話だと思つて居ると、宇間さんは此樣な事を言ふ。

『敎科書は兒童の周圍に充滿して居るんですからね國定だの何だのつて、實に馬鹿氣た話です、電柱に貼附けてある廣告だつて、立派な敎材を提供するぢやありませんか』

是では僕が少し考へ違ひをして居たやうだ、敎科書は充滿してゐるとは驚いたね、併し廣告を敎はる事は

賛成だ、或時僕は新聞の廣告に出て居た漢字を姉さんに教はつて、學校の作文に使つてやつたら、此樣な字は教科書に出て居ないから使つては不可いといふので、小言を食つた事がある、廣告でも何でも教はる日には、こんな面倒が無くなつて可いだらう、これ迄のやうだと、教科書に出て居る字か、出て居ない字かといふことを記憶して置くことだけでも大仕事だからね。宇間さんは尚續けて言ふ。

『それに現今の教授法なんど〻來ては、全く技巧や脚色に囚はれて居るんですからね、やれ教授は五段にせなければ不可の、三段でなくちや不可の、イヤ四段半が正統だのと爭論して居る調子です尚、一層甚い所になると、教師の足は如何に踏むべきか、教師の手は如何に動かすべきか、教師の眼球は如何に光らすべきか、教師の鼻は高きが良きか低きが良きか、教師の口は廣きが良きか狹きが良きかなんて、實に恐入て閉口するですね、吾輩は徹頭徹尾、教授の妙は無技巧無脚色にありと主張するんです、何うです君、自然主義をやつて見ては』

『結構ですね、兎に角教員が大喜びです、それに雜誌の

賣行が大變でせうな』と御父樣は感服の體。宇間さんは、

『さあ、之で大に賣出す積りですがね』と大和を摘み出して火を點ける。

『尙發表された譯ではないですな』と御父樣も一服やつた。

『併し能く注意なさらんと、發賣禁止になると不可ませんよ、此節は自然主義の取締が大變嚴重だといひますから』

『それです實はそれで發表に躊躇してるんです、發表さへすると直ぐに天下を風靡するに極まつてるんですけれども』宇間さんは得意滿面で煙草を輪に吹いて居る。御父樣は暫く考へて居たが、

『何しろ是は大問題ですな、此主義が行はれる事になると、差當り教科書が要らず、師範學校の如きも廢して可し、國家の爲め大變な利益ですね』

『さうですとも、それで僕は先づ自然主義教育會といふものを組織して、大に此主義を皷吹し、文部大臣に建議し、貴衆兩院に請願書を提出する覺悟で居るんです、君も早速入會して吳れ玉へ』

宇間さんの氣焰は恐ろしいものであつた

『入會するのも可いが、建議と請願ばかりは困ります

ね、僕はいつか帝國教育會の役員になつて、建議と請願には飽き〳〵して居るんです』

『ハヽア成程ね』

僕は足がしびれて來たから、煎餅を五枚程摘んで茶の間に失敬した。

七　貳圓五拾錢が眞當

土曜日といへば、常も判を押したやうに、午後一時に來る根古先生が、何したのか正七時にやつて來た。此りやア大變だ、日英戰爭でもオッ始まつたのではないかと、僕は吃驚したね。

『やア、何樣したんです、今日は馬鹿に早いぢやありませんか』、御父樣も驚いたらしい。

『伊奴君ぢやなが今日から時間割を變更したです、晝間は遊んで居て、夜勉强するちうのは、油の不經濟で

すからなア』

『根津君見たやうなことを言ひますね』と言つて居ると、噂をすれば影とやらで、其處に根津先生がやつて來た。兩人は顔見合はせて笑つて居る。

『何か珍聞でもありますかね』と根津先生は四邊を見廻はしながら『時に鹿さんは居ますかね』

『居ますよ、何か御用ですか』と御母樣が臺所の方から出て來た。

『單衣を縫つて頂だかうと思ひまして、もう袷では暑いですからね』

『オヤ單衣が出來るんですね、どれ見せて御覽なさい』と御母樣は根津先生の傍に坐る。

『ナニ安物ですよ』と先生口では言つて居るが、吃驚するなと言つた顔色で、大事さうにメリンスの紫風呂敷から出した。

『久留米ですね、まあ好いこと』御母樣は鳥渡端の方を撚くつて見たが、成程安物だと思つてる風。

『幾ら出たと思ひますか、奥さん當てゝ御覽なさい』先生は驚いて貰はぬのが不平らしい語氣。

『然うですね、あなたはお上手だから』と御母樣は一寸

首を曲げて、『それでも貳圓八拾錢は出しましたでせ
『奥さん冗談言ちや困りますせ、能く御覽なさつてう』
下さい、本久留米ですよ、全くの所、五圓五十錢から一
文も引けません』
『驚きましたね』と御母様は呆れて居る、先生はそれ御
覽なさいと言はぬばかりに大得意。
『豪氣だね根津君』と御父様が言ふ、根古先生は知らぬ
顔で煙草を吹かして居る。衣物といへば猫の衣物で
も見逃さないといふ姉様は、『單衣ですつて』と言ひなが
ら出て來て、『まあ好いことね』と膝に載せていぢり廻は
す。
『根津さんは單衣やらフロックやら、感心に能くお出で
來ですね』と、御母様は如何にも感心した風で御父様
を見ながら『良人も夏服を何とか工面なさらんと不
可ませんよ』
『根津君はフロックが出來たのかね』と御父様も少々
感服の氣味だ。
『ハア、只今計畫中です』と先生大に氣取つて居る。
『フロック基金を貯金して居らつしやるんですと』
御母様が説明した。

『そりや感心だ、能く貯金が出來るね』
『フロックは何時出來るのぢや』と根古先生もツイ釣込まれた。
『實は九月に出來る筈なんだけれども、』と根津先生は姉様の膝にある本久留米といふやつを一寸見ながら『これも必要止むを得ないからね、基金の内から流用したんだ、それでフロックは一ケ月繰延べさ』
やれ〳〵又一ケ月繰延か、金ちやんの御父様なんか、博徒といつたつて何といつたつて豪いや、十月迄には十萬圓位は儲かるんだぞ、情ないぢやないか、フロック一

枚に何時迄ぐづ〳〵してるんだと思つて居ると、

『根津さん、此値段を當てゝ見ませうか』と不意に姉さんが頓狂聲を出した。

『もう解つてるんだよ、五圓五十錢だとさ』と御母様が言ふ。

『いゝえ違ひますわ、貳圓五十錢ですよ』と反物の中から正札を引出して御母様の目の先に突付けた。根津先生はギョットした風で、

『エッ其れは何です』と手に取つて見たが、直ぐに落付いて、

『これは外の札が紛込んだのですよ』と言つて居る。

『どれ』と御父様が根津先生から札を取つて、『成程確かに貳圓五十錢だね』

『然うですね』と根古先生が傍から覗きながら言ふ。

『一寸御見せなさい』と今度は御母様が札を取つた、『全くですね、何うしたんでせう』

御母様は暫く考へて居たが、

『根津さん、此は何店で御求めなさつたの』

『之は確實な品ですよ、白木屋ですからね、實は此うなんです、今日白木屋の番頭が來ましてね、此は五圓以

上の品だけれども帳落になつてるのを盗み出したんだから、參圓五十錢でまけると言うものですから、それを參圓參十四錢に値切つて買つたんです、下宿の女將さんも本久留米だから五圓五十錢の價値は確かだと言つて居ます』

『其番頭さんはあなた御承知の方？』

『いゝえ、僕も女將さんも初めてなんですけれども：：：』

御父樣は默つて聞いて居たが、突然大きな聲で叫んだ。

『それは君、詐欺にかゝつたんだよ、白木屋とか三越とかの番頭だといつて、其樣事を言つてあるく詐欺師があるといふことだ、ツイ先日の新聞にも出て居たんだよ、屹度其奴に違ひない』

『然うぢや〳〵僕も其樣新聞を見たことがあります、此奴は其處邊の勸工場から仕入れて來たものらしいが、天網疎にして漏らさずで、正札を取るのを忘れたのぢや、豪い詐欺にかゝつたもんぢやなァ』と根古先生も驚いた。御母樣と姉樣は色を變へて居る。

『新聞に其樣事が出て居ましたかね、一寸も氣が付か

なかつたなア、それでは愈々やられたんですね』と先生青くなつて了つた、好い面の皮だ、痛快でせうだ、僕は可笑しくつて堪らなかつたから、思はず大聲に笑ひ出すと、『猪尾太郎ッ何です、笑つたりなんか』と御母様が怖い眼で睨めた。根古先生はしきりと考へ込んで居たが、

『根津君、心配せんでも可いぢや、貳圓五十錢のを參圓三十四錢に買つたのぢやから、一反に付て八十四錢一尺に付て僅か三錢の損害ぢや、それで一ヶ月に三錢づゝ儉約するちうと二十八ヶ月には立派に補がつくぢや』

『然うだとも〳〵仕立賃だつて君、一體なら四十錢は取られるんだけれども、鹿子が無賃で縫つて上げるから、夫丈は損害から減ける勘定だよ』と御父様も根古先生に賛成した。

『そりやあ豪氣ぢや、四十錢を三錢で割ると十三と三分の一ぢやから、二十八から之を減くちうと、さうぢや畢竟十四ヶ月間と三分の二儉約すれば可いのぢや、譯はないぢや』と根古先生は鼻汁をかむ、無論膝小僧は整然と顏を差出して並んで居る。

根津先生は本久留米といふやつを膝に載せて、口惜さ

うに見詰めて居たが、

『仕立賃は初めから豫算に入れて居ないからね、倹約するとなれば矢張二十八ヶ月だよ、何うかして取戻す法はないものかなア、兎に角フロック基金から流用したんだから困るんだ、警察に訴えたら何うですかね』

すると御母様が膝を打つて、

『然う〳〵早く警察にお届けなさいよ、警察に届けると直ぐに出るといふ事です、赤坂の警察では賍品の展覧會をやつて居るといふぢやありませんか』

『賍品の展覧會がありますかね、占めたッ』と根津先生は手を拍つて『早速届けることに致しませう』

根津先生急に元氣付いた、丸で反物を盗まれた氣になつて居る。

『賍品の展覧會はあつても、詐欺師の展覧會はあるまいからなア、警察などに届けると直ぐ新聞に出るんだから、教員の威厳に關するよ』と御父様が言ふ。

『新聞に出されちや困りますね、免職になると大變だ』

と根津先生又萎れて了つた。根古先生は鼻汁を一つかんで、

『尙君はくよ〳〵心配しとるかなア、若し君が一ヶ月に三錢づゝ二十八ヶ月儉約することが出來んちうなら、貳百八十億月間に儉約することにし玉へ、然うするちうと毎月三錢の十億萬分の一づゝ儉約すれば可いのぢや、此位の金なら餘り惜しいこともあるまい、然う定めて了ひ玉へ』

『萬歳、僕は百億年間に勉强することに定めるんだぞ、すると毎日遊んで居て差支ないんだ、萬歳』と僕は思はず知らず大聲を出して了つた、ハッと思つて口に手を當てた時は最う遲い、『馬鹿野郎ッ』と來たね、馬鹿野郎に

なつて了つちや到底やりきれないから、そろ〳〵狸と出かけやうかと思つて居ると、宇志先生がやつて來た。此先生は御父樣と同時代の師範學校卒業生で、首席訓導を勤めて居る。坐るなり欠伸を三つして急須を引寄せてお茶を五杯ほど飲んだもんだ、最うそろ〳〵十八番が出るんだなと思つたら、可笑くなつてプッを吹出して了つたが誰も氣付かなかつたから仕合だつた。此先生の十八番といふのは居睡だ、夕食の時に酒を一合づゝ飲むので、夜は直ぐに睡くなつて困ると言つて、毎も辯解するけれども、困るなら酒を廢したら可いだ

らう、それが辯解にはなりやしない。

御父様は小さい聲で、宇志先生に詐欺一件を話し、善後策として根古先生が勸めて居る儉約法まで附加へた。宇志先生は之で全く睡氣も取れて了つて、

『八十四錢？そりや實に惜い事をしたね、八十四錢ありや君、一杯飲めるんだ、何とかして取戻す法はないものかね』

『宇志さん何卒考へて見て下さい、奥さんは警察に屆けたら出るだらうと仰るけれども、警察に屆けると新聞に出るから、教員の威嚴に關すると、校長は言はれるんです』

根津先生は今では宇志先生一人を力に思つて、一生懸命に相談を持ちかけて居る。宇志先生は『それも然うだねえ』と言つた限り、別に面白い考も出ないらしい、腕を組んで考へる形はして居るものゝ、それが實際考へて居るのか、呆然して居るのかも解らぬのだ、根津先生は又萎れて了つた。

『宇志君、例の教鞭の研究は何うした、進行したのかね』と御父様は急に話を變へた。すると宇志先生は得意然と顔を上げて、

『教鞭か、教鞭は研究すればする程大問題になるね、教員の教鞭は武士の兩刀だからな、最も愼重に研究せなければならんよ』

根津先生は今は相談に乗つて呉れるものもないので、下宿の女將と相談して見ると言つて歸つて了つた。

それには構はず宇志先生は話を續ける、

『僕は先づ教鞭の歴史、教鞭の形式、教鞭の實質、教鞭の使用に關する理論及實際、理想的教鞭、教鞭と馬鞭の比較研究、教鞭の教育的價値、此七大項目に分つて研究して居るが、教鞭の歴史などは實に困難な問題だね』

『成程こりや大問題ですなア』と根古先生が感服する。

『所が、教鞭の起源に就ては大概研究が出來たんです、教鞭は畢竟ステッキから進化したものだと考へるです、何故なれば、御承知の如く教育家の始祖ソクラテースは一定の學校を有せず、市場とか、道路とか、樹蔭とかで教授したものだ……』

『然うだ〳〵ソクラテースは野合的教育をやつたんだね』と御父様が言ふ。

『所が、西洋人の習慣で、外出の際は必ずステッキを持

つものだから、ソクラテースも矢張りステッキを持ちながら教授したものだ、又アリストートルも並樹道を歩行ながら教授したので、之を逍遙學派と稱する位だから、屹度ステッキを持て教授したに相違ないのだ、此ステッキが今日の所謂教鞭だね』

『こりや振つてるなア、教員の教鞭は武士の兩刀で、常に身を放さず持つて居るのが適當ぢやから、これから教鞭をステッキに利用することにしては如何でせう』 根古先生が乗出す。 僕は呆れて了つたが、

『犬の糞なんか突いたステッキで、僕等の頭をコツン

とやられては、堪らないなア』と思はず口を辷らす

と、早速煙管の雁首でコツンとやられた。

『この生徒を打つといふ所が、馬鞭と教鞭との類似點で、而して一は臀を打つて道を走らせ、一は頭を打つて智識を進むるのだ、小學校令には體罰を禁じてあるが、あれで教鞭の教育的價値を半分は減殺するね』

と宇志先生が言ふと、

『鞭撻が最も簡便なる管理法ですな、御説の通り生徒は打たんければ言ふ事を諾きません、至極御尤です』

と根古先生が大賛成をして居る、生徒といふものは

實に悲慘なものさ。

『所で君、敎鞭の形式といふと何んなことを研究するんだ』と御父様が訊く。

『敎鞭の形式？之が亦大變面倒な問題だテ、敎鞭の形式といふのは、畢竟敎鞭の形狀を研究するんだね、即ち敎鞭は太いのが適當か、細いのが適當か、長いのが可いか、短かいのが可いか、鞭先を細くするの必要があるか否か、若しありとすれば如何なる程度にすべきか、柄を附ける必要はないか、若しありとすれば之を如何なる形狀にすべきか、即ち丁字形が適當か「

形が適當か、或は又犬の首とか象の鼻とかの如き、動物の形狀にするのが適當か、又敎鞭は圓いのが可いか、四角なのが可いか、三角が可いか、六角が可いか：：：：』

『宇志さん其邊は一寸僕に考へさして下さい、』と根古先生は一寸腕を組んで考へたが、やがて靜かに口を開いて、

『然うですな、圓は多角形の極限ですから、圓くするも六角にするも大した違ひはないですなア、所で四角形と仰るのは、正方四邊形ですか、長方形ですか、菱形

ですか、梯形ですか、又三角形と仰るのは、等邊三角形ですか、二等邊三角形ですか、不等邊三角形ですか、直角三角形ですか、鈍角三角形ですか、鋭角三角形ですか』

此質問には流石の宇志先生もグッと來たと見えて、暫く返事もなかつたが、

『未だ其處迄は研究が達いて居ないです、何れ其邊迄進めなければならないとは思つて居ますけれども』

と逃げて了つた。

『それが確定せんければ、僕の專門の方からは一寸研究が出來んですなァ』と根古先生は鼻汁を一つかんで默つて了う。僕は圓いのが一番可いと思つたね萬一三角棒なんかでコツン〳〵やられた日にや、實に堪つたもんぢやないからね。

『それで教鞭の實質といふのは』と御父樣が訊く。宇志先生は根古先生に話の腰を折られたので、氣が乘らない語氣。

『教鞭の實質といふのは、畢竟教鞭は金屬が適當か、木が適當か、竹が適當かといふやうなことを研究するんだね』

これは吾輩生徒に取つては、頗る重大問題である、萬一それが鐵か樫かの太いやつで、おまけに三角と來た日にやア、僕等は毎日兜を被つて學校に出なければ助かりやうはないと思つたから、

『苧稈が一番可いんだ、鐵の棒なんか重くッて先生に持堪ッこはないや』と言つてやつたら、又『馬鹿野郎ッ』と怒鳴られた。もうぐづ〳〵しちや居られないと思つたから、僕は早速次の間に引下つて、狸をきめ込んで了つた。すると宇志先生が、

『此節の生徒はあれだからね、益々敎鞭を太くするの必要があるんだ』

『併し君、頭を打つのは成るべく止し給ひよ』

とお父樣が云ふ。するとお母樣が、

『あなたは何時も其樣な甘いことばかり仰つしやるけれども、猪尾太郎なんどはお臀を打つた位では利目がありまん』

八　兎耳坊の悪戯

近來兎耳坊の悪戯といッたら、實にお話になつたものぢやない。水いぢり火いぢりは無論のこと火鉢の灰を攫み出しては疊に振撒く、銅壺のお湯にはハタキを突込む、机に上つては墨を滾す、書物を玩具にしては引破る、包刀を取出しては襖を切る、棒を振廻はしては障子を破る、惡戯に飽きるとお乳と泣く、お乳に飽きるとお菓子をねだる、一日に少くも十五遍は人手を煩はして大小便に行く、殊に人眞似と來たら、何んな事でも

して見やうとするので、之が亦非常に煩るさい、兎耳坊が見てる前では、お復習も何も出來たものぢやないんだ、書物でも手帳でも鉛筆でも、僕が持つてるものを取らなければ決して承知しない、仕方がないから其れを遣つて、他のものを持つて居ると、此度は此れを取うとする、イヤ早や全くやりきれたものぢやないね。姉さんが最う少し働けば可いけれども、晝間は學校に行つて居て、歸ると直ぐに琴、生花、茶湯なんどの御師匠さんに行つて了ふ。夜は無益話ばかりして居て、單衣の綻まで御母様に縫つて頂く、御母様も並大低の事ぢやな

いんだ。學校に通ふのは仕方がないけれども、琴や生花や茶湯なんか習つて何の用にするのかと思つて、姉さんに訊くと『だつてお友達が誰れでも習ふのだもの』といッて居る。之に就ては御母樣と御父樣とは、少々意見が違ふらしい。或時、

『人手も足りなければ費用もかゝるのだから、琴とか生花とか茶湯の稽古なんどは、廢した方が可いだらう』と御父樣が言出すと、御母樣は眼を丸くして、

『人手なんど妾が何樣にでも働きますよ、費用だつて良人、少し食物でも注意すると出るぢやありませんか、琴生花茶湯を廢なんテ、頓でもない事です』と言ふ。

『併し何の役にも立んぢやないか』

『實に良人にも呆れて了いますね、生花や茶湯が出來なくつては、お嫁にだつて行けはしませんよ、何樣家だつて嫁入道具に琴を持たせてやらない家がありますか』

『此の上食物を注意して、琴三味線でもあるまい生命あつての物種だ、誰れでも嫁に行ッて琴を彈いたり、生花をやつたり、茶湯をたてたりなんかして、遊んで居るものはありやしない』

『だつて此節は茶湯や生花も知らないやうなものを貰つて呉れる人はありませんもの、巡査や教員に遣る積りなら知らないけれども』

『馬鹿ッ、巡査や教員なんテ失敬な事をいふものぢやない、教員の子は教員に遣るのが當然だ』

『其樣お積りなら、何も言ふことはありませんさ、そりや妾達のやうな生活をして居ては、茶湯や生花どころぢやありませんよ、女學校だつて上げなくつても澤山ですよ、妾だつて何もすき好んで、役にも立たぬ事に苦勞したかありません、五十圓許りの月給で良人、此れだけの家族が生活して行かうとするには、並大低の事ぢやありませんよ、餘程甘くやらなければ、直ぐに拂が滯りますからね、先月だつてお客があつたものだから、酒屋の拂が貳圓だけ延べてありますよ、鹿子を教員にお遣りなさる積りなら、一日も早く稽古を廢させて下さい』

御父樣は返事に窮したのか、默まつて書齋に退却して了つた。併し御母樣の言ふことも解らぬ、或時は教員は天職だとか何とか豪い事を言つて、金ちやんの御父樣なんか人間でないやうな口をきいて居た癖に、今

日は丸で反對だ、これでは御父様も議論する張合がないとでも思つたのかも知れぬ。

御父様が書齋に引籠つて、何か調物をして居ると、例の兎耳坊が何時の間にか這入込んで居る。御父様はオイ〳〵と御母様を招んで居るけれども、御母様は其の邊に見えない。仕方がないから僕が行つて見ると、御父様が『兎耳坊を彼方に連れてお出で』と言ふから、引張り出さうとするけれども、中〳〵動かない、御父様も仕方がないと思つたものか、舌打ち一つして、古本を一冊兎耳坊に預けた、兎耳坊の奴大喜びで、腹這ひながら書物を逆さに開けて、ムニャ〳〵言つて居る。兎耳坊は毎も書物を持つと腹這になり、新聞を持つと仰向に轉ぶんだ。それで一分間もムニャ〳〵言つて居たかと思ふと、何時の間にか筆を取つて、滴る程墨汁を含ませながら、御父様が書きかけて居る紙に持つて行つて、ズーッと一の字を引張つたもんだ。『コレッ』と御父様は筆を取上げながら『猪尾太郎ッ、何故兎耳坊を能く見ないんだ、何の爲めに其處に附いて居る、御母様を招んでお出で』と怒鳴る。此聲を聞つけたのか、御母様は前垂で手を拭きながら出て來た。すると御父様はいき

なり兎耳坊が汚した紙を御母様の眼の先に突付けて、『此通りだ、お前は何をして居る、今日は忙がしいと言つてるぢやないか、サッサと兎耳坊をお取りッ』

『妾だつて遊んぢや居ませんよ、子供の衣物が汚れて仕様がないから一寸洗濯いで居たんですよ』

『馬鹿ッ、洗濯が何だ、俺の仕事と洗濯と孰ちが大切だ、物の輕重が解らないのか、衣物が汚れた爲めに死んだ人間はないわッ』

御父様は今日は大變に急込で居るので、權幕が烈しいのだ、御母様は『死んで堪るもんですか』と小さい聲で言ひながら、御父様に叱られた口惜し紛れだらう、邪劍に兎耳坊を引寄せて『お前は何故此う惡戯兒でせうねえ』と言つて、兎耳坊が持つて居たインキ壺をグイとも、ぎ取ながら、背中をピシャッと打つた。兎耳坊は御父様と御母様が押問答をして居る間に、最うインキ壺を取つて、コロップを拔かうとして居たのだ、流石の兎耳坊も背中を打たれては、ワーッと泣出して了つた。御母様は委細構はず、それを横抱に引かゝえて茶の間に退陣したが、兎耳坊中〳〵泣止まぬので『何故いつまでも泣くんだ』と、又お臀をピシャッとやられた。すると

一層聲を張上げて泣く『何故いつまでも泣かすんだ』と御父様が書齋から怒鳴る。御母様は『何故泣くんだ』と又一つ打つ。兎耳坊愈々聲を張上げて居たが、其内に泣寢入て了つた。やれ安心と思つて居ると、ドンヂャン〳〵と樂隊がやつて來る、御母様は恨めしい顔をして、兎耳坊の耳に手を當てゝ居たが、幸にも四五軒先の四ツ角で止まつて、カチン〳〵と拍子木を打ちながら口上を述べ始めた、何とかいふ白粉の廣告なんだ、口上が終つたかと思ふと、突然ドーンと高く打ち出した其時は僕でさへ吃驚したね、無論兎耳坊は飛び上つて

了つたのさ。『憎らしい樂隊だねえ』と御母様は泣き出しさうな顔をして居る。それも其の筈だ、御母様は毎も兎耳坊の寢てる内は生返つたやうだと言つて居るのに、樂隊のおかげで又死ぬのだからね、御父様は投げるやうに筆を置て、

『騷がしいなア、廣告樂隊には實に閉口だ、これだもの都會の子供が神經質になる筈だ、ソレ飴屋が來た、ソレ豆屋が來た、ソレ樂隊だ、ソレ廣告だといつて、間斷なく子供の神經を烈しく刺戟するんだもの、此樣事では子供を狂人にして了うか解つたもんぢやない、

路傍で小便すると衞生の害だといつて咎める、市街などに廣告札を立てると、風致を損するなんどゝ八ケ間敷言ふ癖に、あんな騷々しい廣告や、子供の毒になる食物賣を咎むるものは居ないんだ、路傍で小便するのが衞生の害なら、第二の國民たる子供の食慾を挑發して、毒になる食物を賣付ける奴は何だ、市街に廣告札を立てるのが風致を損するなら、第二の國民たる子供の好奇心を挑發して、神經病者になして了う奴は何だ、ベスト以上だ、國賊だ』とブン〳〵憤つて居る。僕は御父樣が此樣に憤つたのを見たことがない。

『眞實に憎らしいですね、彼等騷々しい廣告なんかして、白粉屋一人は儲からうけれども、それがために迷惑するものが、東京中に幾萬人あるか知れませんよ』と御母樣は、人の上まで思ひやつて憤つて居る。そこに持て來て裏隣の謠曲の師匠の家で、『急ぎ候程に』なんかんと、大きな聲でうなり出した。

『堂々たる男の癖に、牛の絞殺されるやうな聲を出して、日がな一日うなつて居るが、實に彼奴等の氣が知れないね、一體謠曲の師匠など言ふ奴は、稅金は納め

て居るのか知らん、彼様近所泣かせの商買には、ウンと税を課けると可いんだ、忌ま〳〵しい』と御父様が言ふ。

『然うですね、少しは近所に遠慮もありさうなもので すがねえ、あの聲は何うです、怖ろしく大きな聲ぢやありませんか』と御母様が相槌を打つ。

『あれで自分では一廉上手の積りなんだよ』と御父様は苦り切つて居る。

兎耳坊は樂隊も通過ぎて、裏隣の謠曲も小止みになつたので、漸つと再び寢付た。御父様もそろ〳〵仕事

に取かゝつて居ると、今度はパン屋だ。パンパーンと怒鳴る聲が、遠くの方で聞える『嫌だね、又パン屋が來るんだ』と御母様は眉をひそめる。此パン屋といふ奴が、亦中〳〵厄介なもので、『パンパーンパン露西亞パーン温たかい』と大きな聲で怒鳴つて、吾家の前を通るものばかりでも、朝飯前後に一人、晝飯前後に二人、夕飯前後に二人位はあるのだから、市中は一日中パン屋の怒鳴で充ち充つて居る有樣だ、おまけに其の聲が普通の聲ぢやない、御父様の言ふには、パンといふ音は破烈的の音だから、皷膜を打つことが烈しいとさ、又根古先生は

パンといふ音は三角形だと言つて居たが、雑誌社の字間さんはパンといふ音は金米糖の形をして居ると言つて居た、僕は一度買つて知つてるから『ナニ四角ですよ』と言つたら一同に笑はれて了つた。毎日〳〵聲ばかり聞かされて口には這入らんし、忌ま〳〵しいパン屋だと思つて居ると、何時の間に來て居たのか突然吾家の前で『パンパーン、パン』と怒鳴たもんだ、兎耳坊はフーンと泣出す。御父様は最う堪らなくなつたと見えて、突然戸外に飛び出しながら、

『オイパン屋〳〵』

露西亞パー……と言ひかけて居たパン屋は、

『ハイ毎度有難うございます、幾つ差上げませうか』

『君等は如何自分の聲だからと言つて、少しは他人の迷惑も思つたがよい、其樣破烈的の音を出さなくとも、モ少し穏かな言方がありさうなものぢやないか』

『こりやア旦那、商買ですからなア、へ、、、何か御迷惑でもかけだんですかね』

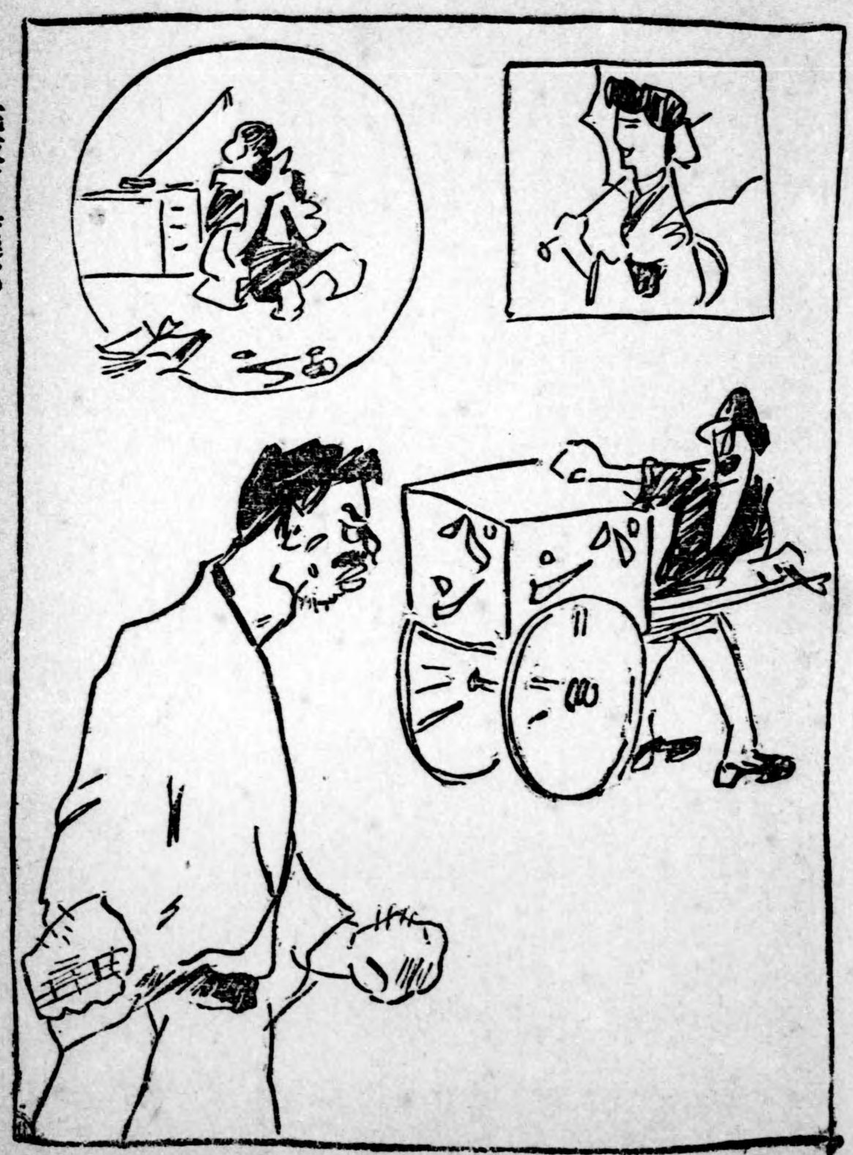
パン屋はパンを包まうとした手を額に載せたが、尚買つて貰うものと信じて居るらしい。

『迷惑どころぢやない、毎日〳〵子供が晝寝の邪魔を

されるので、實に困り拔いでるんだ、以來吾家の前では怒鳴らんやうにして呉れ、其樣高價くつて不味いパンなんか、決して買う氣遣ひはないのだから』パン屋は買う氣遣ひがないと聞いて、態度が俄かに一變した。

『なんだと、大きな顏アしあがつて、人を馬鹿にしてらア、怨鳴なア俺の勝手だ、買うと買うまいと勝手にしあがれ』と二三歩行きかけて、

『何んだ、鰌髯なんか生やしあがつて、勝手な熱を吹いてらア、パンパーンパン露西亞パーン溫たかい』とや



つたもんだ。

『コラッ』と御父様は眞赤になつて居る。バン屋は一寸振返つたが、又直ぐに

『パンパーンパン……』

恐ろしく大きな聲だ、全く德利を割るやうだ。

『コラッ、パン屋ッ』

『ふざけるない、間脫ッ』とパン屋は血相變へて立止まつた。

『良人見つともないからお止しなさいよ』と御母様が玄關から招んだので、御父様は失敬な奴だと息をはづ

ませながら這入つて來た、身體がぶる〳〵震えて居る。

其翌日から一同が申合はせたと見えて來る奴も來る奴も、吾家の前だと一段聲を張上げる、おまけに從來はパンパーンパンだつたのが、パンパーンパンパンパンとパンが二つだけ殖えた。御父様も御母様も憎い奴等だと憤つて居るけれども、何とも仕様がないので、兎耳坊が寢て居る時だと、僕が門の前に立つて見張をすることになつたパンパーンと遠の方で聞え出すと、直ぐに飛出して歩哨に立つのだ、豪い災難さ。